

生鳥沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 5 号

長谷川路可 生誕110周年、没後40周年記念特集

1. 長谷川路可伝〔上〕 渡部 瞭 ... 1
2. ムサ美での路可先生 原田 恭子 ... 21
3. 鵠沼の歴史的家屋をたずねて⑭
長谷川路可のアトリエ 岡田 哲明 ... 28

第2特集 明治地区史跡見学

1. 明治地区の史跡について 小林 政夫 ... 35
 2. 羽鳥耕余塾と周辺の史跡見学 高田 清祐 ... 45
明治地区の主要史跡分布図とルートマップ 折り込み
- 楷の木—鵠沼にも 鈴木三男吉 ... 47
- 今井達夫遺稿② 小説 秋の蛇 今井 達夫 ... 57
- 「鵠沼を語る会」活動の記録 総務部 ... 63
- 編集後記** 66

『新編相模風土記稿』（天保13年、1892）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

長谷川路可伝(上)

渡部 瞭(会員)

はじめに 鶴沼ゆかりの画家は多いが、少なくとも大正期以前の画家では、そのほとんどが貸別荘などの滞在者であり、鶴沼に根を下ろした例は稀である。

長谷川路可は、鶴沼を代表する旅館だった《東屋》の二代目女将=たかの一人息子であり、フランス留学から帰国してから約10年間は東屋の西隣に居を構え、画家としての活動のスタートを切った。また、家庭生活も鶴沼から始まった。さらに、親類縁者、友人知人、大和学園や画塾の教え子など、ゆかりの人々が今でも少なからず鶴沼にお住まいである。

かつて筆者は、会誌『鶴沼』86号に寄せた「旅先で出会った三人の鶴沼人の仕事——天野芳太郎・長谷川路可・杉原千畝——」の中で路可を紹介した。それ以前の『鶴沼』にも路可の名は散見するが、いずれも旅館《東屋》に関する記述の中で名前を紹介する程度であり、人物像や業績を紹介する機会はなかった。

2003(平成15)年、路可のご遺族から藤沢市に作品22点の寄贈があり、完成したばかりの鶴沼市民センター新館、鶴沼郷土資料展示室で小品展が開かれた。

翌年春には市民ギャラリーで寄贈された全作品が披露され、それに合わせて鶴沼郷土資料展示室では「鶴沼が生んだ世界的画家・写真と資料による長谷川路可展」を開催した。筆者は100日に及ぶその展示に携わる機会を得、長谷川路可という人物の多面性と魅力的な人柄にすっかり心を奪われ、また、関係する多くの方々と接し、機会があればその時に得た感動をお伝えしたいと思うに至った。

生い立ち 長谷川路可(本名=龍三)は今からちょうど110年前の1897(明治30)年7月9日に東京で生まれた(長谷川路可の紹介文には、神奈川県生まれ、鶴沼出身、鶴沼の東屋は路可の生家など、さまざまに書かれているものが散見されるが、いずれも誤り)。

高三啓輔著『鶴沼・東屋旅館物語』によれば、父=杉村清吉(1855-1916)は東京の芝で糸組み物を商っていた人で、母=たか(1866-1938)は金沢藩士ともいわれる

長谷川重守の娘であった。

ここで鶴沼とのかかわりの深い、たかの実家=長谷川家について触れておこう。たかの両親の長谷川重守・きよ夫妻は、明治時代には東京・牛込に住んでいた。夫妻には男1人、女6人、計7人の子があったが、長女は夭折した。弟妹の面倒を見る実質上長女の役割を果たした二女=たかは、極めてしっかりものであったという数々のエピソードが残っているという。神楽坂筆筈町の名料亭=《吉熊》の女中頭をしていた三女=忍くげぬまいが、鶴沼海岸に伊東将行が設けた旅館《東屋》あづまやの初代女将おかみにスカウトされるのは、路可こと杉村龍三が誕生した頃のことであった。

学齢に達した龍三は、ミッションスクール=《暁星小學校》に入学し、寄宿舎に入る。後に路可はエッセイ『鶴沼』の中で、「私の叔母が経営していた「あづまや」という旅館を、自分の家のようにして少年時代を過ごした。」と書いている。幼少の頃から、時折鶴沼を訪れる機会があったのだろう。

龍三が小学校3年生のとき両親は離婚し、龍三は母=たかが引き取ることになったため、長谷川姓を名乗り、長谷川龍三となった。これと相前後して長谷川家は東京を引き払い、たかと共に東屋の周辺に移り住んだ模様で、本籍を鶴沼村に移されている。

忍の次に生まれたのが長谷川家唯一の男性である嫡男=繁蔵である。繁蔵とその妻=タケとの間に、一人息子の欽一が生まれたが、龍三とは三つ違いの欽一は、幼少時に父が他界し、母もその前後に長谷川家を去っている。欽一は直ちに家督を相続し、後見人には伊東将行が就いたが、働き者と伝えられている祖母=きよも健在で、長谷川家が結束して欽一を育てることになった。



東屋の池で。左から欽一、光代、龍三(写真提供:風巻家)

その頃、伊東将行が招聘した埼玉県吹上出身の医師=福田良平を院長に《鶴沼海濱病院》が東屋に隣接して開設される。後に福田良平は長谷川家の四女=蝶と結婚した。二人の間には子が生まれなかったため、姪の光代を養子にする。龍三と欽一、光代の二人のいとこ、

時に光代の姉弟をも含めて東屋は格好の遊び場であった。年長の龍三は、彼らの面倒をよく見たので慕われていた。

蝶の下には、そのと寿々という二人の妹があった。寿々は後藤 栄という後に長谷川欽一の後見人となる人物と結婚する。

中学時代 1910(明治43)年、龍三は暁星中學校に進学した。寄宿舎生活は当然続けられたが、帰省したときなど、東屋の滞在客とも交流が生まれた。「谷崎先生が長い間あづまやの離れ座敷に滞在して小説を書いていた。わんぱく盛りの私は、よくのぞきにいったお菓子を貰った。」とか「岸田劉生先生が来ておられるころ、写生に出かける時、ついていって叱られたことがあった。それでも強情に仕事ぶりを見ていた。帰りには絵の具箱を持たされて得々としたものである。」などの思い出を記している。(『随筆サンケイ』昭和39年3月号)

龍三は明治時代の中学生としてはかなり進歩的で行動的であった。例えばこんな思い出も記されている。「恐らく、日本で最初にグライダー滑空をやったのが、何とこの僕ですから、うそみたいなお話であります。いや、まったく信じられないようなお話であります。どなたか図書館に行って、明治四十五年の七月の国民新聞を、根気よく探して御覧なさい。この僕が滑空している写真入りで、デカデカと掲載されているのだから驚きですよ。」(文化女子大学『あけぼの』7号1965.3)

また、5年生の秋には級友と霧積温泉に旅行。道に迷い、野宿したりする。

それより先、1914(大正3)年の夏に長谷川龍三少年は病後の静養の目的で北海道の《トラピスト修道院》にひと夏を過ごした。

「同宿していた詩人、三木露風さんと親しくなったのはこのころであります。」と路可は記している。「また三木露風さんからは芸術の尊厳について説かれました。」とある(『中日新聞』昭和38年12月15日)。さらに「長谷川君は画家になりたまえ。芸術家になってこそ生きがいのある人生が送れるのだ」と言われ、「そして信仰をもつことだね。フラアンゼリコのような素晴らしい宗教画を描きたまえ。長く世にのこるような傑作を修道院の教会堂に描いて、お参りにくる人びとを感動させるんだな。人生は朝露のごとく芸術こそ千秋不滅であることを知らねばならない」と諭された(『PHP』昭和41年10月号)。

実は、三木露風が夫人と共に洗礼を受けてクリスチャンになったのは、路可の受洗より遅く、1922(大正11)年4月16日、復活祭の日であった。

ともあれ、この三木露風との出会いは、その後の長谷川龍三の生涯に大きな影響を与えたことは確かのようなのだ。

北海道から戻って、その年の暮れ、長谷川路可は暁星のハンベルクロード神父より洗礼を受け、クリスチャンになった(会誌『鶴沼』86号に片瀬教会でとしたのは誤り)。洗礼名はLucas(ルカ。当時の訳では路加=聖ルカは医師と画家の守護聖人)。「路可」の雅号はこれに由来することはいうまでもない。

後に龍三は三木露風に『聖ドミニコ像』と題する水墨画を軸装して贈った。この軸はしばらく三木家の床の間に飾られていたようで、結婚後の夏に妻の母が庭の花を床掛けに挿したのを見て、「茶の花にダリヤを添えし柱かけドミニコの絵の風にうごける」との一首が詠まれている。

現在この軸は露風の遺族により三鷹市に寄贈され、《三鷹市山本有三記念館》で公開された。恐らく現存最古の長谷川路可の宗教絵画である。

さて、年号が明治から大正へ替わると、日本画壇に大きな転機が訪れた。

1898(明治31)年、東京美術学校第2代校長だった岡倉天心が排斥されて辞職した際に、自主的に天心と共に辞職した美術家たちは《日本美術院》を結成した。その展覧会が《日本美術院展覧会(院展)》である。日本美術院は天心を排斥した側、《狩野派》《土佐派》など伝統的な家元制度を重視する旧派の《日本美術協会》と対立構造が明確化していた。これを調停する目的から文部省が各派を統合する形で国家主導の大規模な公募展、すなわち官展として1907(明治40)年に開始したのが《文部省美術展覧会(文展)》である(これを《初期文展》とも呼ぶ)。一方日本美術院は、1910(明治43)年、岡倉がボストン美術館中国・日本美術部長として渡米したことにより、事実上の解散状態となり、日本美術院のメンバーも文展に出品するようになる。

1914(大正3)年、文展の審査員を外された横山大観らは、前年に岡倉が没したことを契機にその遺志を引き継ぐ動きを見せ、日本美術院を再興する。そしてこの年の10月、再興第1回《日本美術院展覧会(院展)》が開かれ、その記念すべき展覧会に中学5年生の長谷川龍三は出品し、初入選するのである。出品作は鶴沼海岸で漁網を干す漁師の姿を描いた『浜辺にて』と題する水彩画であった(5頁)。翌年の再興第2回院展にも『工場の裏』[水彩]が入選している。

この段階で龍三がどのような手段で美術を学んでいたか、あるいは誰に師事していたのかは残念ながら詳らかではない。既に紹介した水墨画、水彩画の他に油彩画も遺っている。『少女像』と題された作品(5頁)は、従妹の福田光代を描い

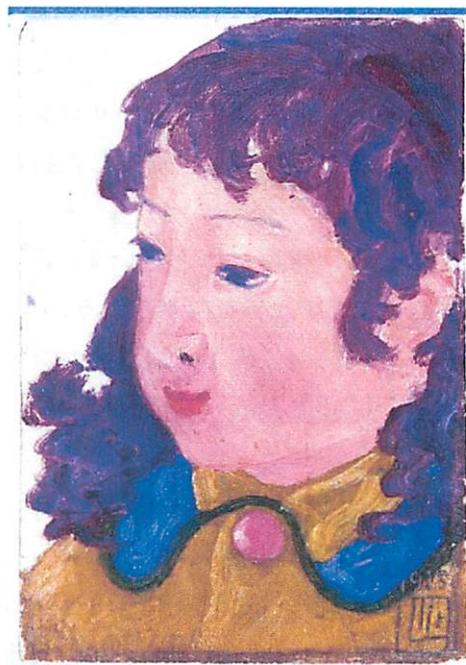


『浜辺にて』[水彩]：1913 再興第1回《院展》入選作



『妙子女史像』[油彩]：1925

(写真提供：井上震太郎氏)



『少女像』[油彩]：1915

(写真提供：石山家)

たもので、1915年とあるから、中学卒業後、あるいは、少女の服装から見て、卒業直前の冬の作かもしれない。‘LUC’と判読できるサインが見られる。受洗の翌年にすでに洗礼名のLucasを雅号に考えていたとすれば注目に値しよう。

暁星中學を卒業した龍三は、東京美術學校(東京藝術大学の前身)を受験したが、1回ではパスしなかった。何しろ今も昔も数十倍の倍率を誇る全国最難関の受験である。現役合格は奇跡に近い。再チャレンジで合格した龍三は天晴れというべきであろう。

この1年間に、長谷川家では大きな事件があった。

1916(大正5)年1月、叔母の東屋の初代女将=長谷川 忍しのぶが入院先の鎌倉の病院で死去したのである。

このことにより、龍三の母=たかが女将を受け継ぐこととなった。才色兼備の忍しのぶの手で「文士宿」としての名声を博していた東屋は、しっかり者のたかの手により湘南随一の名旅館に発展していく。

この、大正期前半は、わが国初の別荘分譲地《鶴沼海岸別荘地》がほぼ完成段階を迎え、華族や財閥の大別荘に加えて、小規模な貸別荘も多く建設された。これら貸別荘の住民には若い文士(《白樺派》の武者小路実篤、小泉鐵など)や画家(《草土社》の岸田劉生、椿 貞雄、横堀角次郎など)がおり、彼らを訪問する芸術家や出版人、ジャーナリストなどが東屋に宿泊したり、交流の場に利用することも多く、東屋は芸術家のサロンといった観があったという。

美校に進んだ路可も、帰省した折などにこうした雰囲気に触れる機会も多かったであろう。

このころ、東屋にほど近い^{はざま}裕家の別荘に、龍三より2歳年上の洋画家=裕 伊之助(1895-1977)が滞在するようになった。伊之助は17歳にして《ヒュウザン会》(→フェウザン会)第1回展(1912年)に名を連ねたという早熟な画家である。年代も住居も近い二人は、しばしば交流を持ったようである(『鶴沼』83号参照)。

美校時代 1916(大正5)年の4月、龍三は東京美術學校日本畫科に晴れて入学し、^{ぞうしがや}雑司ヶ谷に住むことになった。

美校で路可は、^{えいせつ}松岡映丘(1881-1938)に師事した。

映丘は、1881(明治14)年現在の兵庫県神崎郡福崎町に生まれた。本名は輝夫。漢学者松岡 操の子で、医師の松岡 鼎、眼科医で歌人の井上通泰、^{みちやす}民俗学者の柳田國男、海軍軍人で言語学者の松岡静雄の弟、世にいう「松岡五兄弟」の5番目

である。

映丘は、狩野派の橋本雅邦(1835-1908)に学んだが、大和絵の研究を志して住吉派の山名貫義(1836-1902)の門下に入った。1899(明治32)年東京美術学校日本畫科に入学。1904(明治37)年、同校を首席で卒業する。美校卒業後も大和絵に傾倒、その真髓を作品に生かすことに注ぎ、色調、構図の上に典雅な情趣をそえた。1908年から1935年に至るまで同校で教鞭をとり、現代日本画壇を代表する作家を次々と世に送り出した。代表的な弟子としては、生年順に列記すれば、小村雪岱、穴山勝堂、高木保之助、山口蓬春、柳澤真一、岩田正巳、畠山錦成、吉村忠夫、中村爽歩、山本丘人、杉山寧、橋本明治、高山辰雄らがいる。

美校1年の夏、路可は級友と朝鮮から中国東北部を旅行、その印象を『朝鮮風景石山』[水彩、大震災で焼失]として制作し、秋の再興第3回《院展》に出品し、見事入選を果たした。

路可の美校入学前に起こった第一次世界大戦は、ヨーロッパの主要都市を焦土と化し、世界情勢の主導権は米国に移る傾向を見せた。資本主義の成熟は美術界にも大きな影響を与え、伝統的な芸術の追求から、商業美術や建築、服飾など、より大衆的な美術へと新しい展開が見られる時代を迎えたのである。

日本の美術界では、1919(大正8)年には《帝國美術院》の発足にともなって、《初期文展》は《帝國美術院展覽會(帝展)》と改称する。

その第2回帝展(1920年)に路可は『エロニモ次郎祐信』[日本画]を出品し、入選した。カトリック日本画家=長谷川路可のデビュー作とってよかろう。

長谷川路可のデッサン力は、人一倍優れ、映丘以外の教授たちからも着目されていたらしい。このことは、後に滞仏中の路可がルーヴル美術館でドラクロワの『タンジールの舞女』を模写をしていたところに美校教授の結城素明が通りかかり、路可に西域壁面の模写を打診し、ちょうど来仏した沢村専太郎助教授を紹介した(後述)というエピソードからも窺い知ることができる。

長谷川路可は松岡映丘から国画の手法をしっかりと学び取り、その結果を卒業制作に結晶させた。卒業制作は題を『流さるる教徒』という119.8×180.0cmの紙本着色、卷子装の作品で、現在も東京藝術大学大学美術館に所蔵されており、同美術館のホームページ(<http://db.am.geidai.ac.jp/object.cgi?id=2581>)で見ることができる。

一方路可は、学生時代に《聖ヴィンセンシオ会》というカトリックの恵まれない人々への奉仕団体に所属し、活動したらしい。

滞仏時代 1921(大正10)年、東京美術學校を卒業した路可は、5月には日本郵船《加茂丸》の三等船客として単身フランスへ向かう。

退屈な船旅を路可はデッキに出てスケッチをすることで紛らしていたに違いない。それを覗き込む特等船客がいた。尾張徳川家の当主=徳川^{よしちか}義親侯爵(1886-1976)である。侯爵の知人のお話によれば、狩猟が趣味の徳川侯爵は、この時、ジョホール(マレー半島南部)の藩王に^{スルタン}招かれて^{トラ}虎狩りに向かうところだった。侯爵は若い画家の才能を認め、援助を申し出てくれた。侯爵とはシンガポールで別れたが、二人の関係は生涯続くことになる。

今年の春、東京藝術大学大学美術館で《パリへ 洋画家たち百年の夢》と題する東京藝術大学創立120周年記念展が開かれ、夏にかけては新潟県立近代美術館でも開催された。路可が向かった1920年代は、その120年の流れの中でも最も多士済々な日本人画家が渡仏した時代といえる。第一次大戦で途切れた《ベル=エポック》の個性を追求する芸術の復興と《アール=デコ》を機に勃興する商業美術の新展開の時代と位置づける美術史家もいる。画家にとって極めて刺激に富む時代を迎えていた。

路可の場合、こうした西洋美術の伝統を学び、新傾向に触れ、カトリック美術の伝統的な技法を身につけようという理由の他に、美術学校から与えられた役割があったことを^{だいのぶ}基信祐爾氏(前東京国立美術館、現九州国立美術館学芸員)は指摘しておられる。「仏蘭西国及英吉利国滞在中東洋古画ノ調査ヲ委嘱」という辞令を受けていたというのである。

1か月余りの船旅を終え、加茂丸はマルセイユ港に碇を降ろした。そこからは汽車でパリに向かう。

路可は最初に黒田清輝以来日本人にゆかりの深い^{シャルル グラン}Charles GUERIN (1875-1939)に師事、油彩を中心とする洋画技法を修得した。西洋絵画の主流は油彩だからであろう。めきめきと腕を上げた路可は、翌年の《Independent》に出品し、翌々年には《Salon d'Automne》に入選、作品『Une Famille』[油彩]はリール美術館買い上げ作品に選ばれる。

路可が渡仏して2か月後、碓 伊之助もパリに到着、留学生生活を始める。二人のパリでの交友関係については明確な記録が見つからないが、パリの日本人画学留学生は頻繁に交流していた模様なので、かなり交友関係は濃密だったと想像できる(『鶴沼』83号参照)。また、1922年のアンデパンダンでは、路可と伊之助の作品が並んで展示されていたと読み取れる記録もある。

さらに1922年、外語学校を修えた従弟の長谷川欽一も、路可の後を追うように加茂丸で渡仏した。船は同じだが船室は一等だった。これは長谷川家の戸主である欽一を重視するたかの配慮だったといわれる。

欽一は音楽評論家を夢見ており、《ソルボンヌ大学》への入学を目指していた。東京での時代と同様、路可と欽一の共同生活が始まり、欽一は大学受験の準備と語学研修にいそしんだ。

ところが1923年9月1日の関東大震災で東屋は全壊。オーナーの立場だった欽一は、東屋復興のため、志半ばで急遽日本へ呼び戻される。

一方、路可はフランスに残り留学生生活を続けるが、それは単に絵画技術習得のみならず、多岐にわたるものだった。

ボンサマリタン 『長谷川路可画文集』の年譜には大正10年の記述に「戸塚文郷の勧めによりボンサマリタンに加わってロンドンに行く」とある。

《Bon Samaritan》とは、新約聖書にある「善きサマリア人」のフランス語読みであろうことは判断できるが、それ以上のことは判らない。あれこれ悩んでいたところ、ある方が小坂井 澄著『人間の分際―神父岩下壮一』という書物をお貸しくださった。それによると、こういうことらしい。

1920年秋、ロンドン郊外のチェルシーに寝たきりの生活を送るヴァイオレット=ススマンという元修道女を訪ねた岩下壮一は、彼女の信仰生活の深さに触れて感銘を受けた。そこで岩下は、当時ヨーロッパで学んでいた暁星の後輩、戸塚文郷、小倉信太郎、長谷川路可をロンドンに呼び寄せて、4人でカトリックの青年伝道団を組織することを目論んだ。これが《ボンサマリタン》である。これはそれ以上には発展しなかったが、それぞれ宣教の意志を固めたようである。

中でも最も若い路可は、修道女からカトリック美術の道を勧められ、結局その道に進むことになった。小倉信太郎は召命を感じ、ウルバノ大学(ヴァチカンに隣り合う宣教師養成のための教皇庁立大学)に学ぶことになるが、中途退学をして日本に帰国する。結局、岩下壮一、戸塚文郷の2名が神父として日本カトリック史に名を遺すことになるのである。

岩下壮一(1889-1940)は信州松代藩の士族出身の実業家(三井物産を経て電力、紡績、製紙、銀行などの経営に携わる)=岩下清周きよちかの長男。暁星で路可の先輩に当たる。暁星中學校2年の時に受洗、カトリックの信徒となる。この時の教父は先輩の山本三郎で、後に壮一の妹=雅子と結婚し、壮一の義弟となる。なお山本三

郎は、カトリック片瀬教会ゆかりの山本庄太郎の三男で山本信次郎の弟である。

壯一は暁星卒業後一高から帝大哲学科で和辻哲郎、九鬼周造らと同期。ケーベルに私淑し、ギリシャ語、ラテン語といったヨーロッパ古典を学ぶ。帝大卒業後、七高(鹿兒島)の教壇に立ったが、1919(大正8)年、文部大臣命により私費で英仏に留学。ロンドンのセント=エドモンズ大神学校で神学を修めた後、ヴェネツィア教区の推薦により教皇庁立ウルバノ大学に学んで司教となり、ヴェネツィア教区から派遣された宣教師として帰国する。

帰国後の彼は、東京を拠点にカトリック学生の指導をする傍ら、知識人神父として健筆を振るう。東京司教区に移った彼の後半生は、1931(昭和6)年に就いた富士山麓のハンセン病施設《復生病院》の院長という仕事に捧げられた。

戸塚文郷(1892-1939)は海軍軍医総監=戸塚文海の子。暁星で路可の先輩に当たる。一高から帝大医学部に進む。一高時代に受洗、カトリックの信徒となる。この時の教父役を務めたのが岩下壯一であった。

1921(大正10)年、路可と同じ年に医学留学生として渡仏し、ストラスブールのルイ=パストゥール大学に学び、帰国後は医師資格を持つ神父として、結核に苦しむ人びとのために病院を造るなどの活動をした。訳書、著書も多い。

壁画模写 20世紀初頭、ヨーロッパ各国の探検隊が競って西域を中心とするアジア各地で遺跡を発掘し、多くの遺物をヨーロッパに持ち帰った。中には壁画をそっくりはぎ取って持ち去る例もあった。

これに心を傷めた東京帝國大學の松本亦太郎教授、京都帝國大學の沢村専太郎助教授らは、せめてこれを模写することはできないだろうかと模索していた。

模写には確かな技術を持った人物が必要である。そこで白羽の矢を立てられたのがフランス留学中の長谷川路可だった。

松本教授と路可との接点は、1924年ブラッセルで開かれた国際学術会議で渡欧した際、大使館から依頼されて路可が通訳を務めたことにより、松本から信頼されたと語っている。松本からの模写依頼を初めは固辞したが、西域の壁画こそ日本美術の源流という指摘が路可を決断させた。

路可を沢村専太郎助教授に引き合わせたのは東京美術學校の結城素明教授である。その経緯は先述した。沢村は、路可の模写期間中、作業に付き添って交渉その他のマネージメントを引き受けた。

在仏日本大使館に出入りしていた セルジュ エリセーエフ Serge Elisseeff (ロシア革命前にサンクト

ペテルブルグにあったエリセーエフ商会の御曹司で、ロシア読みの名はセルゲイ。ベルリン大学に留学中、^{しんむらいづる}新村 出に出会ったのを機に日本留学を志す。東京帝國大學国文科を明治45年に優秀な成績で卒業（外国人として初の卒業生）、夏目漱石の門下でもあった。ロシア革命後フランスに亡命、帰化。この頃はパリ大学高等研究院教授だった）を仲介者として交渉が進められた。

先ずはパリのルーヴル美術館、ギメ博物館に収蔵されている ^{ポール ペリョ} Paul Pelliot (1878-1945 タリム盆地を中心にシルクロードをを探検したフランス人の言語学者。中国語など数か国語に対応することでも名高い) のコレクション、路可はそれらのうち40点近くを模写することができた。

続いてベルリンのフェルケルクンデ博物館およびインド美術館に納められていた ^{アルベルト フォン ルコック} Albert von Le Coq (1860-1930 中央アジアで考古学的発掘をしたドイツ人の探検家。著書『中央アジア秘宝発掘記』は中公文庫にもなっている) のコレクションの多くを路可は模写することができた。しかし、第二次大戦の際連合軍によるベルリン攻撃で現物の多くが失われたため、路可の模写しか残っていないものがほとんどで、考古学的、美術史的に貴重な財産といえる。

さらに大英博物館が所蔵している ^{オーレル スタイン} Aurel Stein 卿 (1862-1943 中央アジアの学術調査に大いに貢献したハンガリー系英国人の考古学者、探検家。中央アジアではタリム盆地を中心に1906-1908年、1913-1916年、1930年と、3回の遠征を行ったほか、1910年以降インドの考古学調査も手がけ、1912年にナイト爵に叙された) のコレクション、路可はそのうち30点以上を模写している。

これらを路可は足かけ3年の歳月をかけて集中的に模写した。

一般の画家が練習用に模写するのと違い、考古学的な資料として模写するのであるから、「重ね描き」といって直に作品に和紙を重ね、ときにめくって確かめながら写し取るという方法で正確に模写が行われた。

路可の模写作品は現在東京国立博物館、東京大学、京都大学、東京藝術大学に収蔵されている。その数は路可の記録によれば125点に及ぶ。

この間の事情は梶信祐爾氏の研究『東京国立博物館保管中央亜細亜画模写と長谷川路可』（東京国立博物館研究誌『MUSEUM』第572号）に詳しい。

東京国立博物館の東洋館3階展示室では、この路可の模写を現在も定期的に交換しながら展示している。

この壁画模写という経験は、日本のフレスコ壁画のパイオニアとして、その後の長谷川路可のライフワークにも大きく役立ったに違いない。

国際交流 先に「大使館から依頼されて路可が通訳を務めた」と書いたように、在仏日本大使館では、パリに滞在している日本人留学生を通訳として雇うことがしばしばあったらしい。

しかし路可の場合、通訳に加えて日本画家としての特技が生かされた。

1921年摂政宮(後の昭和天皇)訪欧の返礼として、当時パリに在住していた朝香宮鳩彦王(1887-1981)夫妻は、ベルギー王室を訪問の際、ブラッセルの日本大使館で晩餐会を催した。この時長谷川路可、三浦環(1884-1946)が同席し、三浦環はアリアを歌い、路可は席画(即席で絵を描く見世物的技法)を披露した。マリ―=アンリエット王妃から「藤の花を」と注文を受けた路可は、たちまち幾房かの藤の花に飛び去る燕を添えて描き上げた。

この人選は、恐らくパリの日本大使館が行ったものと思われる。三浦環は押しも押されもせぬ日本を代表するオペラ界のプリマドンナであったが、路可の方は美校を出て間もない若輩者である。数多いたパリ在住の日本人画家の中でも新参者に過ぎなかつただろう。この路可に、失敗したら国辱ものの大役を担わせたのは、よほどの敏腕という触れ込みがあつたに違いない。路可自身、「ひや汗ものの思い出」と記しているが、大げさにいえば大日本帝国美術界の代表選手と見込まれたわけである。

1925年《ベルリン日本美術展》が開かれた。代表として小室翠雲(1874-1945)本名貞次郎。南画壇の重鎮が渡独。路可はこの展覧会に作品を出品していたかどうか不明だが、ベルリンのフェルケルグンデ博物館で西域壁画の模写をしていたために、開会式に呼ばれたらしい。開会式にヒンデンプルク大統領(1847-1934)が臨席した。日本画家として紹介され、握手をした路可は非常に感激したと記している。路可27歳の時である。

なお、《ベルリン日本美術展》は1930(昭和5)年夏にも開催されており、こちらの方が規模も大きく、よく知られている。

第一次世界大戦終結に伴う1926年《パリ国際航空委員会議(路可は万国航空会議と記述)》が駐仏日本大使館で開催されたとき、フランス代表としてフォッシュ元帥(1851-1929)が出席した(日本代表は田中館愛橋博士)。最終日のパーティーに席画を披露するために招かれた路可は、元帥のために雲海に昇る旭日と富士を描いて献上した。

路可は留学中に第一次大戦の両雄に接する機会を得たわけである。

フレスコ・モザイク 1926(大正15)年、留学生活も後半に入り、路可は拠点をパリ南郊のフォンテーヌブローに移し、《フォンテーヌブロー研究所》にてPaul ^{ポール} ^{アルベール} ^{ボウドワン} Albert BOWDOIN(1844-1931)にフレスコ画、モザイク画技法を学ぶ。

本来イタリア語の fresco とは〈新鮮な、できたての〉を意味する形容詞(英語の fresh にあたる)で、名詞として、^{しつくい} 漆喰を塗ってまもなくそれがまだ乾き切らないうちに描く画法、およびそのようにして描かれた絵画に限定して用いられ、普通、フレスコとはこの意味で使われる。

建築物の装飾法として、古代、中世、ルネサンスの長期にわたりモザイクと並んで重要で、モザイク以上に普及を見たフレスコは、しだいに油彩画に、そしてタブロー画に地位を譲り、18世紀を最後にほとんど衰退する。しかし、20世紀になって、壁面に直接に装飾する適切な画法として再びフレスコへの関心が高まり、^{ストラッポ} strappo(伊。英語の strip)という、^{にかわ} 膠などを用いたはぎ取り技法の開発により、多くの作品が修復、制作されるようになった。

この技法を日本人として初めて本格的に学び、各地に少なからぬ作品を遺し、また多くの後継者を育成した第一人者が長谷川路可である。

モザイク画とは大理石、陶片、色ガラス、その他の硬質な素材を絵の具をキャンバスに置くようなイメージで配置し、すきまなく敷き並べて、壁画や床を装飾する芸術の技法である。フレスコが西方キリスト教美術の伝統的な技法であるならば、モザイクは古代東方キリスト教(ビザンティン)美術で多用された技法といえよう。これが中世には西洋美術やイスラム美術にも影響を与えた。

日本では、明治期から単発的にモザイク芸術が見られるようになるが、散見されるようになったのは戦後の東京オリンピックが開かれたころからで、路可が育てた《F.M壁画集団》(後述)の果たした役割は大きいといわれる。

アール=デコ 1925年4～5月、《Exposition Internationale des Arts ^{アール} ^{デコ} Decoratifs et Industriels modernes(現代産業装飾芸術国際博覧会)》がパリで開催された。世にいう《アール=デコ》である。その《日本美術館》建設には、パリ在住の日本人画家がこぞって協力した。勿論、路可もその一人である。

当時のパリに留学していた美術家の主だった顔触れは次の通りである。

金山平三(1883) 正宗得三郎(1883) 霜鳥之彦^{ゆきひこ}(1884) 田中 保(1886) 土田麦僊(1887) 黒田重太郎(1887) 梅原龍三郎(1888) 野永瀬晚花(1889) 小野竹橋[喬](1889) 萩谷 巖(1891) 小島善太郎(1892) 中山 ^{たかし} 巍(1893) 川端彌之助(1893)

青山義雄(1894) 伊原宇三郎(1894) 木下孝則(1894) 里見勝蔵(1895) 碓 伊之助(1895) 林 倭衛^{しづえ} 前田寛治(1896) 小山敬三(1897) 長谷川路可(1897) 佐伯祐三(1898) 岡 鹿之助(1898) 海老原喜之助(1904) ※()内は生年

そして彼らの上に君臨していたのが、既に20世紀初頭からエコール・ド・パリの風雲児だった藤田嗣治^{つぐはる}(→レオナルド=フジタ)(1886-1968)である。



上は1923年4月2日、梅原龍三郎を中心に在仏日本人画家仲間で撮った写真。後列中央が路可、左から2番目が藤田、路可の前が梅原である。この写真は帰国する知人に託して母=たかのもとに届けられた。裏面には筆書きで「母上様 在巴里 龍三 後列左方ヨリ二番目の方藤田嗣治氏に御世話になって居ます」とある。

《アール=デコ》の開かれた1925年、ベルギーのブラッセルでも《ブラッセル文化美術博覧会》が開催され、路可はその日本美術館建設と陳列に参加し、〈レオポルド二世シュバリエ勲章〉を受章している。

この時描かれた『妙子女史像』(5頁)は当時ベルギーに赴任していた三菱商事の井上鳳吉夫人がモデル。井上妙子氏は女優長岡輝子氏の長姉で、『長岡輝子の四姉妹』に紹介されている。井上夫妻は後に鶴沼松が岡に居を構え、妙子夫人は《長谷川路可展》開催中の2004年6月16日、鶴沼で他界された。享年101歳。

留学後半 路可の滞仏は1921年から1927年の6年間ほどだが、これまで触れなかった幾つかの出来事を記しておこう。

1925(大正14)年にはヴァチカン=システィナ美術館に『Introduction del Cristianismo en Japon』[日本画]を寄贈した。この作品は現在でも同美術館のホームページ(http://mv.vatican.va/4_ES/pages/x-Schede/METs/METs_Sala05_01_01_031.html)で見ることができる。

翌1926年、《Salon d'Automne》に『Une femme de Cagnes』[油彩]を出品し、
入選すると共に (Silver Star) 賞を受賞してサロンの会員に推挙された。

また、この年、^{エコール ドゥ ルーヴル}《Ecole du Louvre》の西洋服装史専科を修了した。この事実は帰国後の路可に文化服装学院を初め、幾つかの女子大学などで服飾史を講じるという仕事を保証することになる。

1927年早々、《Salon de Paris》に『Nue』[油彩]を出品して入選を果たしたのを最後に、長谷川路可はフランスを離れる。

鶴沼時代 1927(昭和2)年早春、年号が大正から昭和に替わって間もない日本に路可は帰国する。

なつかしの東屋は、たかと欽一の手で見違えるように復興されていた。ハイカラ好みの欽一の意見によるものか、池を狭めて本格的なテニスコートが2面設置されていたし、本館は更に拡張され、ダンスホールまで設けられていた。かくして湘南随一のリゾート旅館として、藤沢町を代表する地位を得ていたのである。

欽一は帰国する路可のために、東屋の隣りに瀟洒なアトリエを用意してくれていた。それがどのようなものであったかは、岡田哲明会員が別稿で専門的な立場から解説しておられるので、そちらに譲りたい。

今日では海外留学経験者はそれこそ掃いて捨てるほどいるが、昭和初期の日本では、まだまだ希少価値があった。

ここに昭和2年4月3日の横濱貿易新報の「畫伯歡迎會」と題する記事があるので引用しよう。

藤澤町が誇りとする世界的大畫伯長谷川路可氏の歡迎會は金子町長以下
卅六有志の發起のもと一日午後六時より鶴沼海岸東家に於て開催された主賓
歡を盡し路可氏より色紙一枚宛を贈られた

なにしろ「藤沢町が誇りとする世界的大画伯」として帰郷したのである。

路可が滞仏中の1921(大正10)年、恩師=松岡映丘は、穴山勝堂、岩田正巳、狩

野光雅、遠藤教三らと《新興大和絵会》を結成していた。

帰国したばかりの路可は、第7回《新興大和絵会展》に『アンレブマン・ヨーロッパ(ギリシャ神話)』[フレスコ]、『怒』[日本画]、『黙』[日本画]を出品した。ことに『アンレブマン・ヨーロッパ』は、フレスコという技法を用い、ギリシャ神話をモチーフにした意欲的な作品の例であろう。

翌年の第8回《新興大和絵会展》には『松本博士像』[日本画]、『聖母の光栄に捧ぐる三部作』[フレスコ]、『預言者サロメ』[フレスコ]、『キリスト降誕』[フレスコ]、『二人の天使』[フレスコ]を出品。会員に推挙された。

以後、1931(昭和6)年に《新興大和絵会》が解散するまで、会員として積極的に活動する。

翌1928(昭和3)年1月15日、路可こと長谷川龍三は知人の紹介で知り合った菊池登茂と結婚、世帯を構えた。

路可の美校時代にあたる1919(大正8)年以来、片瀬の山本庄太郎家の一部屋に仮聖堂が設けられ、ミサが捧げられていた。この集いに路可が出席していたか、また、帰国後の路可の教籍はどの教会に属していたかは今のところ未調査である。

東京司教区から分離独立して横浜教区が新設された際、山本家の仮聖堂をよりどころに、《片瀬教会》が建設される(後述)が、それは路可が鵜沼を離れた直後である。

日本初のフレスコ壁画 路可の帰国した1927年は、小田急(小田原線)の開通した年である。小田急電鉄創設者=利光鶴松(1863-1945)が、とくにルルドの聖母に捧げる聖堂を建てることを希望された長女の静江氏(1893-1971)の意を受けて北多摩郡狛江町岩戸1196に私的聖堂を建設した。その壁画制作を路可が依頼されたのである。

会堂は1928(昭和3)年7月に竣工し、長谷川路可による日本最初のフレスコ壁画が壁面を飾った。その後、路可は『喜多見教会縁起絵巻』という長尺の絵巻物も制作し(この辺、いかにも大和絵画家だ)、1929年の第9回《新興大和絵会展》に出品後、同教会に納められたが、現在は東京大司教館に保管されている。

静江氏の私的聖堂は、1931年東京大司教区に献納され、東京教区《カトリック喜多見教会》となった。小田急沿線では最も古いカトリック教会である。

日本初のフレスコ壁画は、1978年、教会閉鎖の際に路可の弟子の宮内淳吉氏によりストラップされて保存されていたが、喜多見駅前の現在地に移転後は正面壁

の聖母子像だけが小聖堂に復元され、左右壁面部分は惜しくも復元されていない。

1928(昭和3)年、現代風俗絵巻『楽堂』(日比谷野外音楽堂における軍楽隊の演奏を描いたもの)を制作し、宮内省蔵という記録がある。この現代風俗絵巻は、松岡映丘を中心とする《新興大和絵会》の中核的な日本画家12名による連作で、現在宮内庁三の丸尚蔵館に収められている。

そして11月3日、明治節に長女=百世さんが誕生し、路可は父親となった。

明るく1929(昭和4)年、1月30日から12月20日までの毎日、國民新聞に連載のおさらぎ大佛次郎(1897-1973)の時代小説『からす組』の挿絵を担当した。故高木和男氏によれば、「この画は毎日、路可さんのお母さんが新聞社まで届けるのだと私の祖母が話していた」とのことである(『鵠沼海岸百年の歴史』)。

連載終了後、改造社から前後篇に分けて刊行された単行本『からす組』の装幀、口絵も当然路可が担当した。

現在これらは横浜の《大佛次郎記念館》で見ることができる。

4月1日には小田原急行鉄道江ノ島線が開通し、鵠沼海岸駅が開設された。大震災の復興期以来、鵠沼南部はかつての別荘地から定住住宅地に変貌しつつあったが、小田急開通はその傾向に拍車を掛ける結果となった。

路可の滞仏中に、松岡映丘の直ぐ上の兄=松岡静雄が海軍を退役し、鵠沼での学究生活に入っていた。映丘は、小田急線開通後は時折鵠沼の兄=静雄邸を訪れ、その都度長谷川路可邸にも顔を出したようである。

この年11月、路可は初めての個展を《高座郡役所》(藤沢駅北方、現在の《藤沢商工会議所》付近にあった)で開いた。出品作は『旭に波岩』[日本画]、『雪中寿光』[日本画]、『松竹梅』[日本画]など、日本画が中心である。

世界一周 1930(昭和5)年の早春、30代の長谷川路可は、《^{ローマ}羅馬開催日本美術展覧會》の日本側代表である60代の横山大観(1868-1958)、50代の^{ひらふくひやくすい}平福百穂(1877-1933)、40代の松岡映丘(1881-1938)各氏の随員としてイタリアに渡航した。この他にも^{おおちしょうかん}大智勝観(1882-1958)、^{はやみぎょしゅう}速水御舟(1894-1935)が渡伊している。

《羅馬開催日本美術展覧會》は、1930年の4月26日から6月1日まで《Palazzo delle Esposizioni(ローマ市立展示館)》を会場として行なわれたもので、院展官展を問わず、当時画壇で活躍する第一線の日本画家たちが新作や近作を発表した大規模な展覧会であった。プロデュースは大倉財閥の総帥=大倉喜七郎(1882-1963)、運営には横山大観があたっている。時の首相ムッソリーニ(1883-1945)を

総裁にかかげて行われたいわくつきのもの。この時の代表は、〈Cavaliere Corona de Itaria(イタリア共和国功労勲章)〉をイタリア政府から受けている。

路可はこの機会にヴァチカンを訪れ、第260代教皇=ピウス11世(Pope Pius XI)(在位：1922-1939)に拝謁。その折『切支丹曼陀羅』[日本画]を献呈している。

システィナ美術館に『Introduccion del Cristianismo en Japon』[日本画]が1925年に寄贈されているから、その際も拝謁の可能性があるが、いずれにせよ路可が拝謁した最初の教皇である。

大倉喜七郎は、1か月余りにわたるこの展覧会の慰労のために、帰途は欧米を経由する世界一周旅行を一行にプレゼントし、年末には銀座資生堂ギャラリーにて《世界一周スケッチ展》が開催された。

帰国した路可は、浜松の洋画家=佐々木松次郎(1897-1973)らと《カトリック美術協会》を結成した。翌々年の第1回《カトリック美術協会展》より、渡伊前年の第10回《カトリック美術協会展》までほぼ連続して(第7回だけ記録が見あたらない)出品し、中心的な役割を果たした。

翌1931(昭和6)年6月に、早稲田大学建築学科で路可が講演をした際、標本室でフレスコの実演をして見せた。その後、この絵の上から塗料が塗られ、長期間所在が不明のままであった。

それが1996年になって発見され、6層の塗料を丁寧に剥がして、路可の弟子、原田恭子、友山智香子両氏の手で修復がなされた。1998年、この建物が取り壊されることになり、建物の外壁そのものを切断し、その年に開設された《^{あいづやいち}會津八一記念博物館》に収納、展示(<http://www.waseda.jp/aizu/col3e.html>)されることになった。その経緯は、同館の『研究紀要』第1号に有田 巧氏が報告している。

《新興大和絵会》はこの年に解散し、路可は『湖畔のまどひ』[日本画]を第12回《帝展》に出品した。以後、《帝展》には《新文展》に替わる1934(昭和9)年まで毎年出品する。

鵠沼時代の後半になって、路可は自宅アトリエなどで児童と青年たちのための画塾を開いた。青年には石膏デッサンや油彩といった洋画の技法を教えたい。教え子には現在も鵠沼に御健在の方が多数おられる。

1932(昭和)7年、路可は当時オランダ領インドシナ(蘭印)だった現在のインドネシアのジャワ島、バリ島などを歴訪し、その印象を『熱国の夜』[日本画]として制作、第13回《帝展》に出品する。

この外遊期間中、8月1日に二女=百合子さんが誕生した。

大和學園 カトリックの敬虔な信者で教育者、伊東静江(路可が日本最初のフレスコ壁画を描いた喜多見教会を建てた)によって 1929(昭和4)年小田急江ノ島線開通に合わせて高座郡大和村(現大和市南林間)に設立された《大和學園女學校》は、当時一般的であった良妻賢母型の女子教育の概念を大きく覆し、土に親しみ自然に触れる中で神の摂理を識ることを教育理念に掲げた革新的な学校として始まり、江口隆哉(舞踏)、久保田万太郎(演劇)、四家文子(音楽)といったその道における著名な教員が招かれた。長谷川路可もその一人ということになる。

翌1930年には《大和學園高等女學校》と改名。1932年には《大和學園小學校》、1935年には《大和學園幼稚園》を開設。伊東静江の教育目標である「カトリック精神による豊かな人間形成」は、初等教育から中等教育(戦後は短大も開設)にわたる一貫した教育制度によって形作られることとなった。路可は当時自宅のある鶴沼から最も近いカトリック系ミッションスクールであった同校の美術教師として、1929年から、恐らく目白に転居する1937年まで教壇に立った。

また路可は、学齢期になった長女=百世さんを小学校に入学させた。

なお、《大和學園高等女學校》は戦後の新学制で《大和学園女子高等学校》になり、さらに1979年《聖セシリア女子高等学校》と改めて今日に至っている。鶴沼には《大和學園高等女學校》での路可の教え子という方も何人かおられる。

徳川邸壁画 1933(昭和8)年、あのフランスに向かう「加茂丸」の船上で知己を得た尾張徳川家の当主=徳川義親侯爵が、東京目白にあった明治期からの戸田(紀州徳川家の姻戚)邸跡へイギリスのチューダー様式を模した自邸(設計:渡辺仁)を建てることになったとき、路可は階段室、食堂の上部に『狩獵図』、『静物画』というフレスコ画を描き、インテリアもデザインした。これがきっかけで徳川侯爵との交流が深まることになる。この目白の徳川義親邸は、東京大空襲の戦火からも免れ、女子學習院の仮校舎に用いられたり、戦後は日本社会党結党の舞台になったりという話題があるが、1968(昭和43)年に解体され、長野県野辺山高原に移築された。解体の時、路可のフレスコ画は路可の弟子=宮内淳吉氏の手で丁寧にストラップされたが、未だに移築先に復元されていない。

移築された建物は、当初ホテルとして活用された。現在は《八ヶ岳高原ヒュッテ》と名を変え、レストランとティーラウンジとして、夏休み、ゴールデンウィークのみ営業している。山田太一原作のTBSドラマ『高原へいらっしやい』の舞台となり、人気が出た。近くには《藤沢市八ヶ岳野外体験教室》がある。

続けて1935(昭和10)年、徳川邸の敷地内に建てられた《財団法人徳川黎明会徳川生物研究所》の建築装飾に従事し、天井画を描いた。これは現存する。

この年の春から夏にかけて、台湾を巡り、旅行中の4月16日に三女=清子さんが誕生した。この旅行では旅先の台北教育会館で個展を開いたりしている。

1935(昭和10)年帝展の改組で画壇が大きく揺れ、松岡映丘は長年勤めた母校東京美術学校を辞し、同年9月に門下を合わせ《国画院》を結成した。

小村雪岱、吉田秋光、服部有恒、穴山勝堂、高木保之助、岩田正巳、山口蓬春、狩野光雅、吉村忠夫らと共に長谷川路可も結成メンバーの一員となった。

国画の創造を目指し、大和絵を中心としながら展覧会は洋画、彫刻にも門戸を開いたが、1937(昭和12)年第一回展を開催したのみで、翌年の映丘の死去により展覧会活動を休止、研究団体として存続し、1943(昭和18)年解散した。

1936(昭和11)年、《フォンテーヌブロー研究所》におけるフレスコ画、モザイク画の師=Carlo ZANON^{カルロ ザノン}が来日し、路可を訪ねて鶴沼にも滞在した。東屋には和室しかないため、1933年伊東将行の末娘=政子夫妻が建てた洋式の《鶴沼ホテル》に宿泊したという。

文化服装学院 並木伊三郎が、遠藤政次郎とともに1919(大正8)年、当時の東京赤坂区青山南町に開設した《並木婦人子供服裁縫教授所》は、1935(昭和10)年2月5日財団法人《並木學園》に組織変更を行い、学校としての基礎が固められ、1936(昭和11)年10月校名を《文化服装學院》に改め、時代の変化を先取りした教育内容の拡充を行った。この段階で徳川義親の紹介(松本亦太郎の紹介という説もある。恐らく双方であろう)で《Ecole du Louvre》で西洋服飾史を修めた画家=長谷川路可の存在を知った並木は、1937(昭和12)年2月、遠藤を鶴沼の路可宅に派遣し、説得に当たらせた。遠藤政次郎は雛人形を手みやげに路可宅を訪れ、説得した。路可は一旦断るが熱心な説得に折れ、4月から教壇に立つことを承諾した。以後、終生文化服装学院との関係は続くこととなる。

東京目白の徳川侯爵邸周辺に造成された分譲地を優先的に購入できた路可は、先ずアトリエを建て、次いで母屋を建築して1937(昭和12)年に一家は転居する。

かくして長谷川路可の10年にわたる鶴沼時代は終わりを告げるのである。

[つづく] (物故者は敬称略)

(わたなべ りょう)

ムサ美での路可先生

原 田 恭 子(東京都豊島区在住)

タイトルのムサ美は武蔵野美術学校のことである。現在、美術大学となっているが、その前身のムサ美とちぢめて呼んだ時代の武蔵野美術学校は、非常に特異なアカデミアであったと思う。いつも私は誇り高きムサ美出身ですという。ムサ美こそ私が路可先生と運命的に出会ったところであり、ムサ美がフレスコやモザイクの研修の場を与えてくれたところであるのだから。特に私はいいたい。あのころのムサ美は実に面白かったと。

路可先生はよく冗談でおっしゃっていた。「僕は死んでも口だけは生きてるよ！」雑談の名手といわれた路可先生ならではのジョーク。それ以来、先生の口髭をたずさえた口は、いつも空中で何やらつぶやかれたり、時にはクックッと笑ったりしていられるのだ。

1957年イタリアより帰国されると間もなく武蔵野美術学校のデザイン科で教鞭を執るとほぼ同時に、フレスコ同好会を作られた。

帰国後間もない路可先生は、ムサ美で田中理事長や名取校長に、情熱的にフレスコとは、モザイクとは、建築と装飾とはと、あの魅力的な語り口で語られたに違いない。ムサ美側も先生の情熱に応え、新築した校舎の1階から4階までの壁面すべてフレスコが描けるよう造った。ムサ美の協力を得て、後のF.M(フレスコ・モザイク壁画集団)は路可先生と共に活動の輪を広げてゆくのだが、田中理事長の英断に負うところは大きい。心から感謝している。

さて、文字通りの階段教室は、フレスコの習作、実験の場となり、3階の広い踊り場では、路可先生のフレスコ画の実演。フレスコはこう描くというわけだが、油絵科の教室で教授方が油絵はこう描くと実際に描いてみせることなどなかったから、大変刺激的で大いに勉強になった。こういうことは路可先生は事もなげになさっていた。

共同制作

路可先生は常々共同制作を提唱していらした。ムサ美はその実験の場でもあつ

た。共同制作とは、例えばオーケストラのようなものと想像していただくと良いだろう。演奏者は卓越した技術を持ち、コンダクターのもとで作曲家の音楽を演奏する。さしずめ作曲者は下絵を創る画家であり、時にコンダクターでもある。フレスコやモザイクの技法を駆使して、単に下絵を完成させるのではなく、個人ではなかなかでき得ない大画面の壁面を調和を持って描いてゆく。約半世紀前路可先生がこのようなシステムで次々とモザイクやフレスコの床や壁面を制作していたが、当時は大変珍しいことであったといつてよいだろう。

2～30年ほど前までは、洋画は油絵と決まっていたし、恐ろしいことには、油絵の具の発明以前の絵画技法については、美術学校で教えるなんてことはほとんど皆無であったといえる。それは何も日本だけのことではなく、私がローマにいたころ(1969)、アカデミアでテンペラを学ぼうと留学した友人は、そんな講座もなく、図書館で調べろといわれたと聞いている。フレスコもヴェネツィアのアカデミアに唯一サエッティがフレスコで作品を描き、教えていた。

そんな時代であったから、階段教室での習作や、卒業制作での大画面は、他の学生たちから何だきたないことやってるな—という声が上がったりした。

1960年代初頭、路可先生は、約40歳も年の差のある学生たちに、ご自分の壁面に対する情熱を持って指導してくださったのだが、それから間もなく始まる実際の仕事としての共同制作の場では、特にフレスコにはこの年齢差や技術、経験の皆無の学生たちに体験させてくださったものの、その差は歴然と表れ、早い話が失敗したところも大きくあった。フレスコの場合は、モザイクと異なり、まさに絵画であるから、個々のスタッフの力量に負うところ大であるのに、未熟な学生で、まだ個性とはいえないクセでもろに描いてしまったら、路可先生の下絵は台無しになるわけだ。

それでも先生は私たちに希望を託してくださったのか、よくおっしゃっていたのは、皆でチヴィタヴェッキアの教会の描き残してある天井画を描こうということであった。当時は夢のまた夢のような話であったが、先生にとっては実現可能なことであったに違いない。路可先生の脳裏には、システーナのミケランジェロの天井画が、また、アッシジやパドバのジョットのフレスコ画が常にあり、こんなことをよく言っていた。「キミ！ミケランジェロはネ、あのシステーナの天井画、太い筆で一気に描いているんだよ。凄いネー！」と、分厚い近眼の眼鏡の裏で見開いた先生の目は輝いていた。後に私もまだ修復前の天井画を見ているが、薄暗いシステーナの中に一步入ると、ぼんやりと天井画が目に入って

くるが、目が薄暗がりになれてきて、突然金槌でガツンと一撃、一瞬気が遠くなったか、目の前が真っ暗になっていた。あまりの迫力、その衝撃は後にも先にもない。好きだの嫌いだのの問題ではないとつくづく思う。多分路可先生は何かの機会があって、ミケランジェロの天地創造のフレスコを間近に見ていられたのだろう。ミケランジェロは全く一人であの天井画を描いている。が、私の想像するところだが、当然、フレスコの壁を作る砂や石灰の準備、高い足場に材料の上げ下ろしという雑事をする若者はいただろうと思う。

路可先生も、一人でチヴィタヴェッキアの教会で描かれた。

共同制作について書いてきて、ミケランジェロも路可先生も一人で大画面を描いたのに何故と思うだろうが、一人で描くのは画家として理想の形であるのは言わずもがな。

路可先生の共同制作の理念の中には、現代の建築と装飾という、すなわち建築空間に絵画なりデザインを融合させるということである。次に共同制作の二つの例を挙げてみたい。

早稲田大学の床モザイク

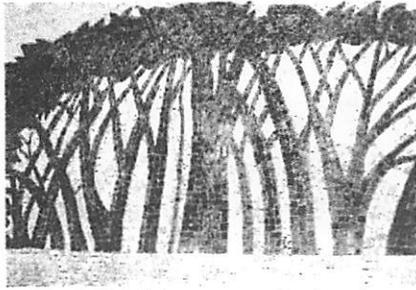
1961年、路可先生からモザイクの仕事が私たちにもたらされた。建築家村野藤吾氏の設計になる早稲田大学文学部校舎の、1階エレベーターホールの床モザイク。私たちにとっては処女作となる。ちょっと興奮する初仕事ではないか。

共同制作の共通項は、ローマンスタイルである。古代ローマ時代の技法である。材料は白、黒大理石をハンマーと金床を使って手割りで必要な量を準備する。基本的な大きさは4cm角のキューブである。

初めての建築現場での仕事は、常時10人前後の若者が路可先生の下絵「杜のモザイク」に従って造ってゆく。杜は黒いシルエットで描かれている。複雑に重なる枝や葉の描く厚みなど考えつつ、石組みによってその形態を出してゆくが、必ず基本的な技法として、物の形の輪郭に沿って石を一行組むことが要求される。同時にバックの白大理石も、杜のシルエットを囲むように一行、形に従ってまわしてゆく。この周囲を囲むことでシルエット状の形はしっかりその姿を主張する。石組みには、目地の流れも忘れることはできない。

バックとなる空間は白大理石を横に流して貼るが、タイルのように硬く、テッセラが行儀よく並びすぎないように神経を使う。これも共通項である。

この最低二つの共通項をもって、路可先生の提唱する共同制作は、破綻なく統一がとれて完成となる。



早稲田大学文学部1Fエレベーターホール
床モザイク『杜のモザイク』(部分)



黒大理石部分自然摩耗による
表情



ムサシノフレスコモザイク
ローマ数字の1961年

約半世紀近い年月が過ぎた今、このモザイクを見るとき、日本ではほとんど目にはすることはない柔らかい肌合いを発見するであろう。それは、研磨なしの仕上げであったから、年ふるごとに、この建物を使用した人々の靴底や毎日の掃除のモップ掛け、それらが自然研磨となり、人為的な機械による表情とは比べものにならないものである。この後、日生劇場、国立競技場と床モザイクを作ってゆく。しかし、両方とも現場仕事であるが、機械研磨だ。

割面がそのままの完成間近の床の上でいただいた、目白の先生のお宅よりのお祝いのお赤飯のおにぎりは格別のものであった。ふと指先を見ると、アッ小豆と食べようとしたら、血豆であった。ハンマーと金床の石割で、石をたたかず指をたたいた結果の血豆だった。

今年の春、思いもかけぬ連絡が、早稲田大学の丹尾教授より入った。文学部の校舎が取り壊されるという。青天の霹靂！ 何てことだ！ 「あのモザイクは時の分かるモザイクです！」 「そうなんです。村野藤吾も建物も時代と共に変化し、身体になじむものと言っています！」 丹尾先生はそれから半年、建物を遣すべく働くが、早稲田の壁は硬い。

何度かの建物の見学会が催された。最終回の日、私は見学者に言った。「裸足でモザイクの上を歩いてください。」オーッとという歓声上がる。今流行の言葉で言えば癒やしの感触に、思いがけず感動する。機械研磨では得られないこの表情は、近々消えるだろう。現在のローマには古代の敷石道、モザイクが遺っている。ちょうどあの古代のモザイクのような姿を見せているというのに。このように簡単に壊すというのは、今や日本のお家芸！ 例え耐震のためといったとしても補強の方法はあるだろうに。国立競技場の床モザイクも、10年ほど前に壊されてしまった。

路可先生は戦後ビルが次々建てられてゆくを見て、これからは壁画を描いて

も簡単になくなるようなことにはならないネと、大変嬉しそうにお嬢様に話しておられたとか。それが先生が亡くなって40年の間に、ほとんどの建物は消えてなくなり、フレスコもモザイクも共に消えてしまった。

フレスコの共同制作

路可先生の下絵で共同制作した作品は、4作と思う。私が参加したのは浜松の鴨江寺食堂の『樹林図』。女性のF.M会員6名が路可先生と共にフレスコを描いた。モザイクとは異なり、実際筆で絵を描くのであるから、参加するそれぞれが確かな描写力は言わずもがな、フレスコの体験なくしては不可能である。時には筆のクセまたは器用、不器用などで画面が破綻を来すことがある。実際、過去にそういうことが起きていた。

先生は、かつて失敗したとき、そのことについては一言もおっしゃらなかったが、明らかに失望の色を顔ににじませていられた。人選を誤ったということより、時に先走ってしまった若げの至りというべきか。

その経験があったためか、浜松のフレスコ壁画は、純日本画の技法を使った共同制作であった。

スーツケースを持って、女性6人を率いる先生。冗談に「何だか宝塚の巡業みたいだね」と嬉しそうだった。因みに路可先生は当時の宝塚の花形、寿美花代の後援会長だったとか。

さて、『樹林図』は6本の木(竹、杉、白樺、栃、紅葉、桜)はくじで決めた。私は紅葉だった。次はそれぞれの木の描き方の伝統的な技法を一人一人に指導される。この伝統的技法によって、突出するクセは押さえることができる。紅く染まる紅葉は一枚一枚の葉を何百では多分きかないぐらい重ねて描く。それが乾くと薄い紅葉の葉が重なって見える。幹は境内の紅葉の木をジッと見て頭にたたき込んだ。

先生は中央に桜と鳥をフリーハンドで描かれ、それは美しいもので、皆声もなく先生の筆の動きを凝視した。下塗りの淡いブルーグレーは、画面が乾いたとき、もやのかかるような、樹林の空間をよく表していたと思う。

しかしこの場合も、失敗があったが、もし先生がもっと長生きされていたら、この日本画の花鳥風月で、寺院か教会の壁面を、本当に日本的なフレスコ画として確立されていたのではないかと想像するのである。

滞在中のある日、夜皆で散歩に出たか、又は夕飯の帰りであったか、寺の門に入ると、先生がふと「上を向いて歩こう」を歌い出され、皆も後に続いた。先生

は「好きなんだよね、この歌が」とおっしゃった。

この『樹林図』の前は、F.Mの男性ばかりで静岡のシャンソンビルにフレスコを描いてられるが、私は見る機会のないままいつのことか壊されてしまったという。

目白で

目白の先生のアトリエは時にパネルにモザイクをする場にもなったり、また、先生の作品の下準備のお手伝いをすることもあった。

多分そういうときに、路可邸のダイニングキッチンテーブルを占拠してしまったと思う。

よしの夫人はいつも変わらずニコニコしていらした。随分ご迷惑をおかけしたことと思うが……。丸テーブルに先生を囲んでビールが空けられ、夫人の姪の方が山ほどの天ぷらを揚げてくださった。今は亡き夫人に心から感謝する。

路可先生の話はいつも愉快だった。フランス時代の話には、気軽にピカソや藤田嗣治の名が飛び出してきたり、イタリア時代では、ファッツィーニ、グレコ、マンズーというイタリア彫刻界の巨匠たちとの交流記。

特に印象深かったのは、ファッツィーニとは深い友情で結ばれていらして、氏のアトリエはそれこそ路可先生の理想とするアトリエだったのだろう。

「大体日本の大家となったら、ちょっと面会といっても、最初書生が出てきて少々お待ちくださいといって、1時間も2時間も待たされるんだよ。だけどファッツィーニのアトリエは出入り自由だ。」と書いていらした。

イングリッド・バーグマンの話は、「彼女が記者のインタビューを受けるとき、ドイツ語もフランス語もイタリア語も使い分けていた。すごいねー」と。

勿論シリアスな話題もたくさん。法隆寺の火事にあった壁画を修復しないことにひどく立腹されていた。

先生は69歳で亡くなられた。今私が先生と同じ歳になっている。つくづく思う。余りにも早くなくなってしまったと。晩年の10年間、フル回転でフレスコやモザイクの仕事の他に、ラジオに、雑誌などの記事にとどれほど忙しかったかと思う。

後書き

この原稿を渡部氏から依頼されたとき、私はちょうど40年ぶりに長崎に行っていた。また、その前には既に書いた早稲田大学のモザイクの件があったりと、路

可先生関係の事柄がぐるぐる渦を巻いている感じの時であった。

40年前、路可先生の遺作となった長崎の西坂にある日本二十六聖人記念館のフレスコ画にも40年ぶりに再会した。この西坂の丘に登るには、右の階段から、左の急坂からとどちらから登ってもかなりハードである。

69歳の先生、しかも前年心筋梗塞で入院されていたから、壁画を描くため毎日下の宿からこの坂を登るのはいかばかりであったかと、私も痛い脚をかばいつつ登った。

女子医大の医師から、このまま静かにアトリエで小品を描いて過ごすなら10年、もし今までのようにハードなことをやれば命の保証はないといわれたと当時私も伺ってはいたが、若さの罪というか、余りピンと来なかったように思う。ただこの西坂での仕事の後、よしの夫人を伴ってイタリア旅行の計画を立てられたが、ちょうど私も3か月の予定で欧州の旅に出る計画を立てていた。行きはシベリア経由でと先生に話すと、ボクも是非そのコースで行くよとおっしゃるのには、断固反対した。先生は非常に残念がられて、結局飛行機でローマ着。法王様に謁見。チヴィタヴェッキアに。是非よしの夫人に壁画を見せると張り切っていた。そしてパリ、ドイツにいるステンドグラスの工房で修業中のF.M会員の様子を見て、ヴェネツィア入り。旧友のサエッティ、アカデミア教授に会い、ローマから帰国という御予定であったが、ローマで法王様に謁見され、その時イスラエルのナザレに新しく建設された聖母受胎告知堂のための小下絵を法王様にもお見せしたと思う。その数日後、3日間入院の末亡くなられた。チヴィタヴェッキアで御自身の心血注いだ作品を、様々の思い出と共によしの夫人に話したかったのではと思う。真っ青な空、乾ききった熱風が教会の入り口の分厚いカーテンを揺らし、入りきれないくらいの人々で埋まった御堂。葬儀はしめやかに行われた。

西坂の遺作の壁画の前で40年前の出来事を思い、当時先生健康をおもんばかりで、壁画制作は今止めてと、誰かが進言したとしてもやはり先生はなさったと思う。また、当時は今のように健康志向が高かったわけでもなく、病気に関してもひどく無知な時代だったと思う。皆が呑気だった。

最後のローマで、フォロロマーノの一面にあるフランチェスコ修道院を訪ねられ、その後、コンスタンティヌス凱旋門の辺りで、小さなスケッチブックを取り出され、スケッチをなさりながら「スケッチする時間がない……」とつぶやかれた。これが本当に最後の先生の遺作である。数分間のスケッチであった。

(はらだ きょうこ 画家。元F.M壁画集団)

長谷川 路可 の アトリエ

岡田 哲明（会員）



アトリエで制作中の路可

が倒壊し壊滅的被害を受けたのである。

その復興のために長谷川家では嫡子である欽一を急遽鵜沼に呼び戻すことになり、彼は、後ろ髪を引かれる思いで渋々パリを後にせざるをえなかったのである。

こうした留学経験がこのようなアトリエを作る要因になったと私は推測するが、それは、いわゆる従来の日本のアトリエ建築とは大いに異なるものであった。

日本では最も安定した光が得られるとして北側に大きな採光窓を設けるのが、いわばアトリエ建築の常識であるが、ここではそれは全く考慮されていない。当時のパリの現代美術はすでに多様化し写実表現を超えていたから安定した光はもはや無用と知ってのことか。無論知ってはいたであろうが欽一のねらいは、もっ

と違うところにあったのではないかと私は思うのである。

仮に、このスペースにソファ、カウチ、椅子とテーブル、えのぐ戸棚、イーゼルを置いたと想像してみる。壁に寄せかけたキャンバスや額縁、高い天井、レースのカーテン、靴履きの室内、ストーブの炎、コーヒーの香り…私の想像どおりの写真を先日、風巻さんから入手して実はびっくりしている。冒頭の「アトリエで製作中の路可」の写真をよくご覧いただきたい。

欽一は「パリのアパートマンでの生活を再現」したかったのではないであろうか。それは数年前、敬愛する路可と過ごしたパリでの親密な時間を取り戻す必須の舞台装置であったであろうから。

路可は昭和 12 年に制作拠点を東京目白に移すまでの約 10 年間ここを使用した。

長谷川家がこの土地建物をいつ手放したかは定かではないが、ご遺族の記憶によれば昭和 18, 9 年ころだったようである。その後、二三の所有者の変遷があって昭和 30 年に北岡慶太郎氏が購入され現在も同地に住んでおられる。北岡氏は過去の所有者らによって増改築が加えられたこの建物を昭和 56 年に建て直すことを決意され、解体前に内外部の写真を撮影して置かれた。復元作業はその写真と 1/200 の簡単な配置図と北岡氏の記憶をもとに行った。北岡氏の写真は適切に必要な箇所が撮られていたことが幸いして復元図に原案ができた。また本稿執筆中に路可の長女ご夫妻である風巻義孝氏、百世さんから貴重な証言や写真のコピーをご提供いただき、当初作成した復元図にかなりの修正を加えることが出来、より正確な復元が可能になった。この場を借りて御礼を申しあげる。

建築概要

建設地 神奈川県高座郡藤沢町鵠沼字下岡 6632-7〔昭和 5 年版鵠沼地番図による〕

(現住居表示：藤沢市鵠沼海岸 2-9-12)

敷地面積 199.68 坪〔昭和 5 年版鵠沼地番図による〕

建設時期 昭和 2 年ころ

建物用途 アトリエ

構造規模 木造平屋建て

延床面積 17.2 坪

建築仕様

外部：基礎 コンクリート布基礎

腰壁 下見板鎧張り
 壁 漆喰塗りまたはモルタル塗り
 屋根 波板鉄板葺
 内部：床 堅木フローリング張り
 幅木 堅木
 壁 漆喰塗り
 廻縁 削り型ボーダー漆喰塗り
 天井 漆喰塗り 天井高：2.8m
 建具：玄関ドア 開き戸（入りロドアは框戸、他はフラッシュ戸）
 クローゼット扉 両開き框戸、円形削り型文様の鏡板（特注品）
 窓 欄間付き引き違いガラス窓（雨戸なし）
 ガラスは下段の棧の細かい部分はスリガラス、他はトーマイ

設備：電灯・汲み取り便槽（ガス・水道・下水・電話なし）〔建設時〕
 給水は井戸であったと推定される。

離れとして母屋の海側に建てられたこのアトリエは純粋な仕事部屋であり厨房や浴室がない。食事や入浴、就寝は母屋でなされたものと思われる。

なお母屋は平屋建て、6 畳間が 2 間、4.5 畳の茶の間、3 畳の女中部屋、玄関、厨房、便所、浴室という構成であったという（百世さんの記憶による）。

この建物の洋風的特徴を列挙すれば以下ようになる。

- ① 正面、両側面の外観がシンメトリーである。
- ② 入りロドアは内側に開く。
- ③ 踏み込みつまり靴脱ぎがない。とはいっても路可は室内では座布団に座って日本画を画いているから室内を土足にしていたわけではない。恐らく外階段に履物は脱ぎ捨ててあったのであろう。
- ④ 雨戸、戸袋がない。
- ⑤ 柱を見せない大壁構造である。
- ⑥ 内壁と天井の見切りに漆喰塗りの削り型のボーダーがある。
- ⑦ 外壁の漆喰は下見板との見切り部分や窓の上部で外側にカーブして塗り増してあり水切りの機能を持たせてある。

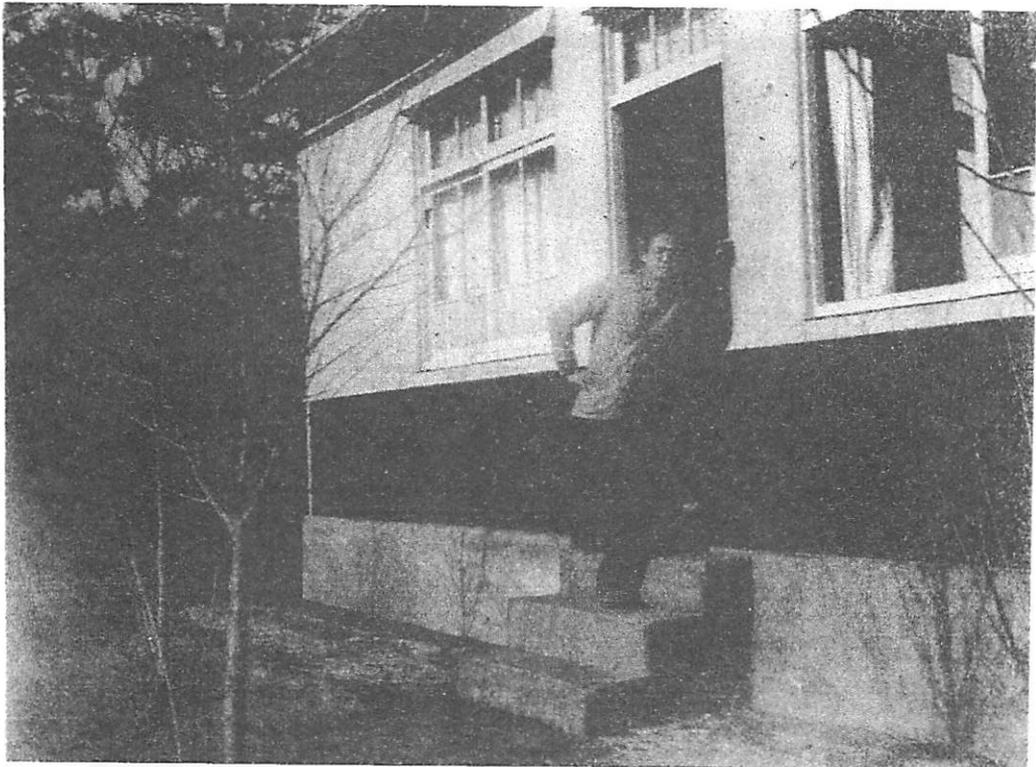
これらは一見、日本における洋風住宅建築と共通しているようであるが、②と③については異なる。雨の多い日本では雨仕舞の悪い内開きのドアを付けないし、上下足の履き替えの習慣から必ず靴脱ぎを設けるのが一般であるからである。

もうひとつ目立つ特徴がある。それは一階の床高がとても高いのである。通常は地面から45~50センチくらいであるのが1メートルほどもある。これは関東大震災に津波被害の激しかった鵜沼海岸での津波経験者（建主も大工も）の発想であろうと思われる。

（おかだ てつあき）

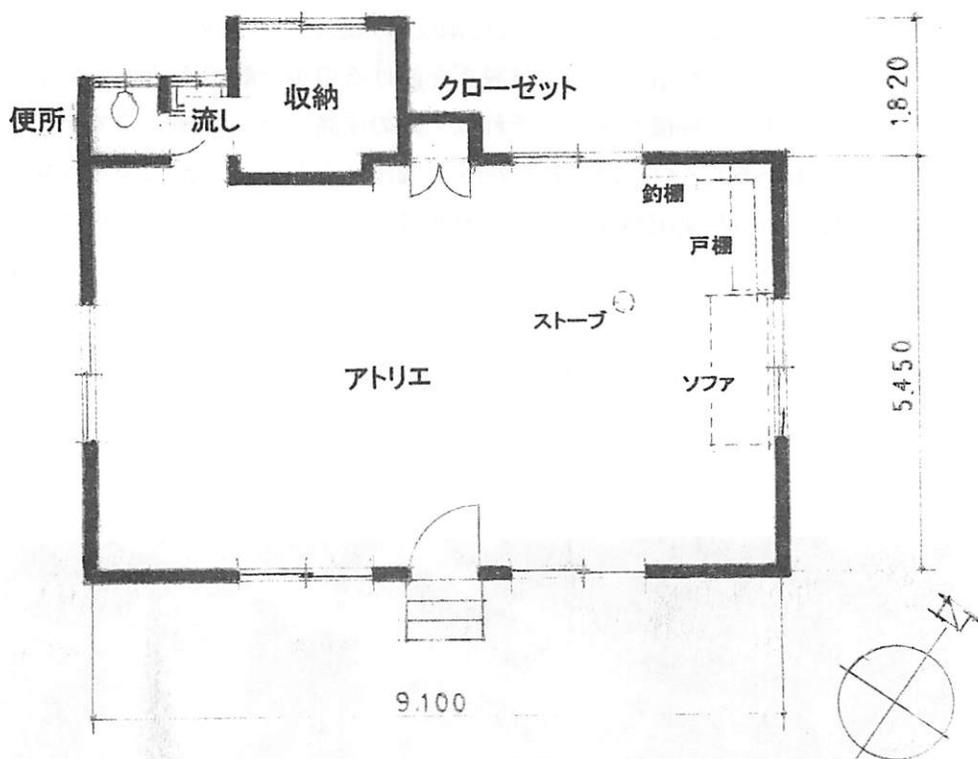
参考文献：『鵜沼・東屋旅館物語』高三啓輔著 博文館新社

『長谷川路可画文集』長谷川路可著 求龍堂



鵜沼のアトリエの入り口に立つ路可

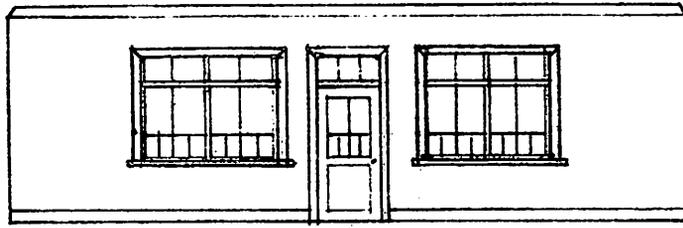
（画伯の表情ははっきりしないがアトリエの雰囲気がよくわかる貴重な写真）



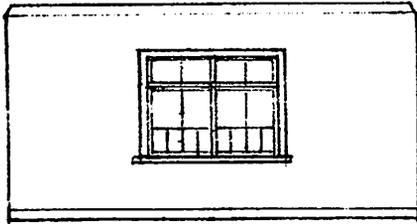
平面図 1/100



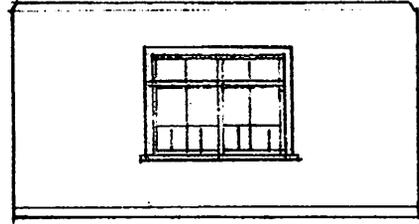
立面図 1/100



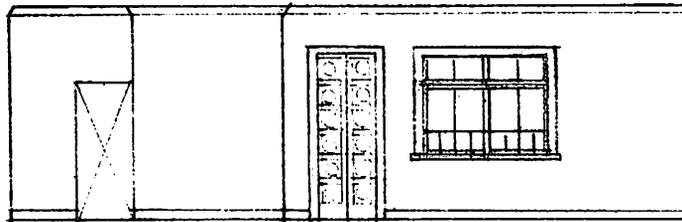
東南面



南西面

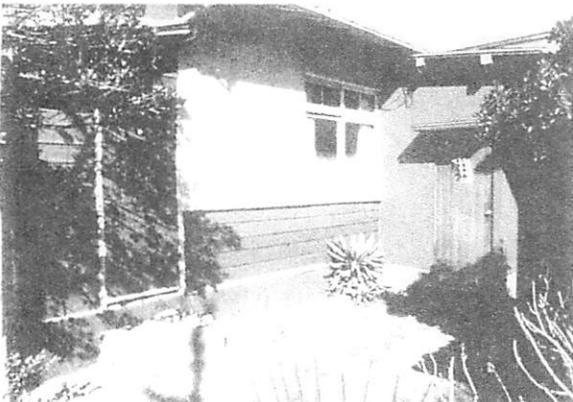
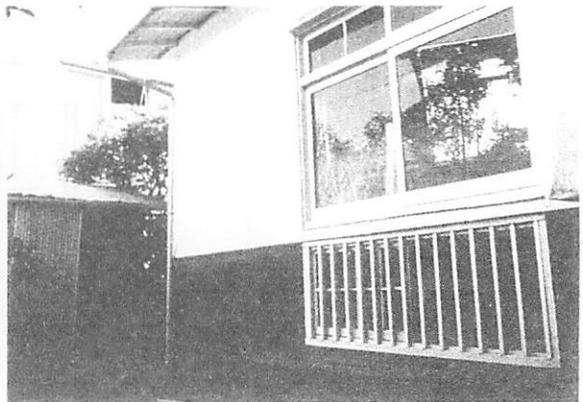
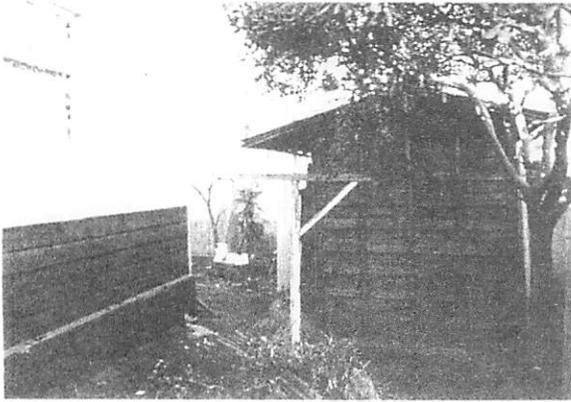
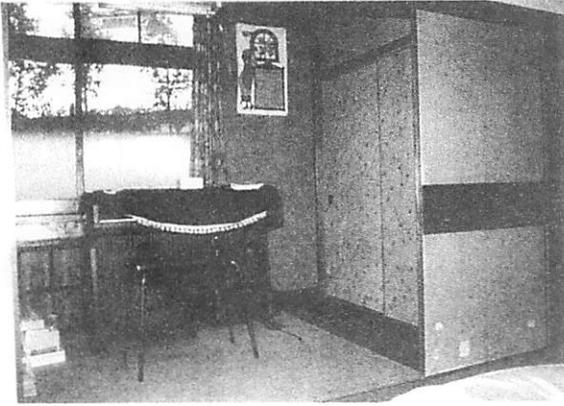
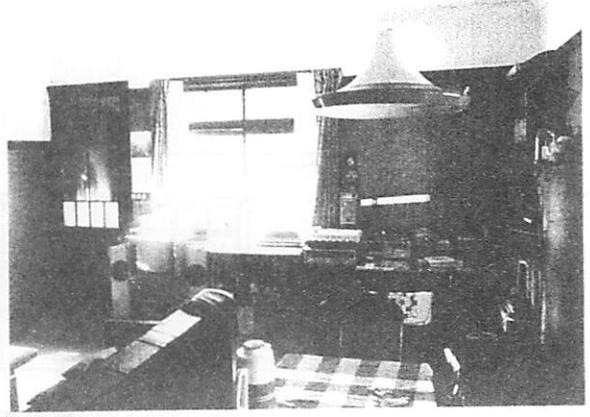


北東面



西北面

アトリエ展開図 1/100



写真提供 北岡慶太郎氏

— 明治地区の史跡について —

小林 政 夫 (会 員)

明治という地区について

明治地区とは、明治市民センターの管轄区域をいう。

明治22(1889)年町村制施行により羽鳥村、大庭村、辻堂村、稲荷村が合併して明治村が生まれた。現在では、明治の名は、明治市民センターや明治小・中学校など学校名と地区名にのみ残されている。この地区の概略の範囲は、旧羽鳥村と辻堂村の北部で、大庭村の一部を含んでいる。東は引地川、西は茅ヶ崎との市境、南は、東海道線の線路、北はバイパス北側の崖下で、縄文海進最大期の海岸線以南の地域の北半分にあたり、湘南砂丘地帯と呼ばれる砂丘地帯である。

平安時代末期の大庭御厨時代に開発が始められた地域であり、京鎌倉往還や大山街道・東海道などの重要な道が地区を通過していたが、水利が悪く農耕にはあまり適せず、集落としては、戦国時代頃から開かれ始めた羽鳥の地域が中心であったらしい。大正5年辻堂駅が開設されたが、線路北側の明治地区は工場地帯として開発された。近年この工場の撤退が進み、辻堂駅北側も、新しい都市として生まれ変わろうとしている。

地区案内各論

※印は、6月19日に「鶴沼を語る会」で歩いた所。

(地図上での位置は番号で示す)

1. 本立寺(宝光山 本立寺) 日蓮宗

本尊は、十界曼荼羅(一塔両尊)、開山日栄。始めは静岡市興津に文禄元(1592)年創立されたが、大正13年現地に移転再興されたもの。

2. 湘南C-X土地区画整理事業

藤沢市と都市再生機構が中心となって、関東特殊製鋼跡地を含む30haを開発するプロジェクトで、新たな都市拠点を形成する計画。2009年3月には一部完成する予定。



工事中のC-X プロジェクト



伊勢屋の墓

3. 伊勢屋の墓地

江戸時代には、四ツ谷・二つ谷付近には、東海道・大山街道を通る旅人相手の立場茶屋が繁盛していた。記録では、柏屋、羽鳥屋、鎌倉屋、伊勢屋、浜野屋、丁子屋などがあった。明治になり鉄道が通るようになると茶屋もさびれ、廃業したが、伊勢屋はその後も茶屋を長く営んでいたと伝えられる。その伊勢屋の墓地が、ここに残されている。

4. 光明真言道場道標

光明真言道場とは、宝泉寺(南の寺)のことで、江戸時代大山詣りの人々は大山の帰り道に南の寺に立ち寄る人が多かったので石塔が宝泉寺の境内にも建てられている。

この付近の地名「^{かんだい}神台」は、平安時代末期の^{おおばのみくりや}大庭御厨に関係があるかも知れない。

5. 大山道道標を兼ねた巡礼供養塔

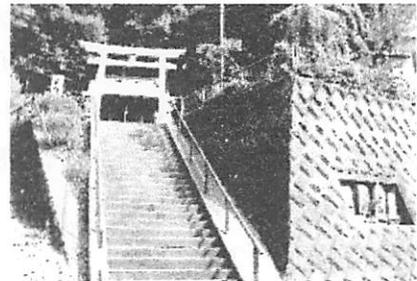
享和3(1803)年用田村角田紋右衛門ほか6名の人たちによって建立され、大山道の道標を兼ねている西国・坂東・秩父巡礼供養塔。右側面には「あふり山わけいる道にしおり置つゆのことはしるへともなれ」との一首が書かれ、左側面には造立の趣旨が刻まれている。

6. 餅塚の辻

「餅塚」の地名由来。昔、ここは大庭の土地で、湿田で収穫が上がらず年貢の負担に苦しんでいた。この土地を辻堂におしつけることが出来たので、大庭では、餅をついて喜んだという。是が地名の起こりであるという伝承が残っている。

7. 折戸日枝神社

祭神は、大山咋命(おおやまくいのみこと)。折戸地区の鎮守。以前は山王権現と呼ばれていたが、明治の初めに日枝神社に改称。ここには、元禄6(1693)年、天保15(1844)年、宝暦6(1756)年、寛永6(1709)年の銘をもつ庚申供養塔があり、社殿裏のがけには、相模野台地を造った古相模川のじゃりの層(礫層)がある。



8. 深正寺跡

明治の初めに廃寺になった東光山深正寺(曹洞宗宗賢院末)の跡。入口に、相模国準四国八十八箇所のうち33番の弘法大師石像を祀る大師堂があり、堂の背後には寺の歴代住職の墓(卵塔)が立っている。



9. 大山街道分かれ道の地蔵

大山道の本道と野道との分かれ道に大山道の道標をかねた地蔵がたっている。その脇に「右野道地蔵も花も 笑いけり」と書かれた句碑が建てられている。句碑の文字は、小学校長水越茅村氏の筆。

分かれ道の地蔵 向かって左が句碑

10. 一里塚跡

江戸日本橋から、13番目の一里塚があった場所。この手前の12番目の一里塚は、遊行寺坂の途中で、14番目は茅ヶ崎駅入り口。

旅人が休む立場茶屋はこの付近に集中していた。

11. 二つ谷稲荷(諏訪神社)

祭神は、保食神(うけのかみ)二つ谷集落の鎮守、二つ谷稲荷とも呼ばれる。元は神台の辻堂426番地にあったが、昭和16年海軍衣料廠の拡張に伴い現在地に移転させられた。神社の境内には、市指定文化財の寛文10(1670)年の庚申塔と天明元年(1781)の道祖神塔がある。

12. 中原稲荷の馬頭観音

嘉永7(1854)年と明治32(1899)年の馬頭観音供養塔がある。嘉永7年のものは、三面三眼八臂で頭上に馬の首をつけ、両手の指をくむ儀軌によるもの。



馬頭観音供養塔→

13. 大山遥拝の大鳥居

万治4(1661)年建立。大山の御師矢野清太夫の勸進により、御府内石工見世持中の八丁堀、松屋町、深川、本所、芝、麻布、伊皿子と、当時の総石工親方衆を動員して製作。江戸で造り、船積みして片瀬浜で陸揚げして運ばれた。



後に倒壊し、天保11(1840)年江戸石工若者中の協力で再建。関東大震災で倒れそのままになっていたが、昭和34年当地出身の端山銀次郎氏が私財を投じて再興した。額東の天狗面は、正宗得三郎画伯の図案による。

←額東の天狗面

14. 田村通り大山道入口

四ツ谷から東海道と分かれ、大山に向う道で、平塚の田村の渡しを渡ることによって「田村通大山道」の名がある。入り口の前不動は、四ツ谷の不動堂と呼ばれ、延宝4(1676)年の銘を持つ不動明王像の乗る大山道道標が安置されている。ほかに万治4年(天保6年再建)の道標もあった。(現在再建されている)ここは、辻堂1番地。

15. 左富士(地名)

東海道を西に下る人にとって、富士山はどこでも右手に見えるが、道の曲がり方によっては左手に眺められる場所がある。珍しいのでそこには『左富士』と呼ばれる。南湖の左富士は、浮世絵にも描かれるほど有名。四ツ谷の左富士は有名にはならなかった。

16. 四ツ谷八坂神社

祭神は、須佐男命(すさのおのみこと)。境内には稲荷社もある。ほかに相模国準四国八十八ヶ所45番の大師石像や庚申塔・道祖神塔がある。

17. 藤井稲荷

旧国道1号線脇の砂丘の上に祀られている稲荷社。地主の藤井家の鎮守として江戸時代に創建されたと伝えられる。



18. 二十三夜塔

陰暦23日の夜、月待をすれば願い事が叶うという信仰があった。二十三夜の月齢の夜集まって忌みごもりをする行事を二十三夜講といい、宿に集まって月読命や勢至菩薩の掛け軸をかけ月の出を待つた。大正時代までは、盛ん

に行われた。この供養塔は嘉永元(1848)年羽鳥向講中の建立。

ほかに正徳3(1713)年建立の庚申塔と享保年代の庚申供養を兼ねた双体道祖神塔がある。

19. 羽鳥向八坂神社

祭神は除疫神としての牛頭天王。地元では天王さんと呼ぶ。境内には、もと曲松家の屋敷神だった曲松稻荷大明神や、羽鳥向信徒の勧請した不動尊が祀られている。

20. ゴルフ場への道の横穴古墳

昭和36年芙蓉カントリーのゴルフ場への取り付け道路の工事中に5基の横穴が発見され、各種の副葬品が発掘された。8世紀後半のもの。現在は埋め立てられて見ることはできない。

21. 城神明社

祭神は、天照大神。地区の鎮守で創立は永久5(1117)年と伝えられる。一説には、鎌倉権五郎景政が所領を伊勢神宮の御厨に寄進した後、ここに天照大神を勧請したとも伝えられている。

かつては広い境内を持っていたが、バイパスの開通によって社地が削られ昔のおもかげはなくなった。境内には、道祖神や疱瘡神、庚申塔、地神塔、馬頭観音などの石造物が立ち並ぶ。



城神明社石造物群



22. お梅地蔵(延命地蔵)

寛政9(1797)年建立の延命地蔵。お梅地蔵と呼ばれるのは次のような言い伝えによる。『昔、ここには名主を勤めていた杉山家があり、そこには気だても良く評判のお梅ばあさんがいた。年をとってから眼が見えなくなり、息子夫婦の世話になっていた。嫁は姑の評判が良いのをねたみ、眼が見えないのを良いことに、おがくずを鰹節、ミミズをうどんといって食事に出すようになった。嫁の仕打ちに絶望したお梅ばあさんは、孫の初節

句の日に井戸に飛び込んだ。』

その後この家では不幸が続き、おばあさんのたたりと考えた子どもたちが供養のために立てた地蔵といわれている。

23. 秋葉堂

火伏せの神「秋葉大権現」を祀る。霊験あらたかで町内に火事があっても類焼を防いでくれるので、二軒と焼けた事がないといわれる。堂前にかけては池があったが、蓋をされて防火水槽に変わった。橋は池当時の名残。

※ 24. 徳昌院跡

羽鳥の名主、三觜八郎右衛門が小笠原東陽を招聘し明治5年3月、廃寺徳昌院に私塾「読書院」を開き、地区の子弟の教育にあたった場所。読書院の名は、徳昌院による。

無住の廃寺であったため三觜八郎右衛門【佐次郎】と三觜小三郎は、私費により修繕を行い、塾として使用できるようにした。

明治6年2月の学制（明治5年8月太政官布告）により、神奈川県下初めての小学校「羽鳥小学校」となる。明治8年この近くに神奈川県第三師範学校が置かれたが、翌年には廃止されている。

現在は、その史跡を示すものは残されていない。

『新編相模風土記稿』

徳昌院 羽鳥山と号す。曹洞宗大庭村宗賢院末本尊彌陀を安ず、開山を松谷宗雪 本寺六世正保元年三月七日寂す、と云ふ。△鐘楼 寛政中再鑄の鐘をかく。△老梅庵 寶永の頃は小名鷹山にありて禅僧面山が隠棲の所なりしが、其後境内に移すと云ふ。

※25. 羽鳥大三觜家

江戸時代頃までは、村の八割ほどが三觜姓であったので、総本家を大三觜と呼んでいた。「皇国地誌」によれば、三觜家の先祖は、豊臣氏に仕えていたが、大阪落城の後この付近に住んでいたが、たまたまこの地に三羽の鶴が遊んでいるのを見て、ここに帰農し三觜と名乗り、ここを開拓して羽鳥を村名とした。と書かれている。

『皇国地誌』

「元和元(1615)年大阪落城ノ後此辺ニ来タリテ居トス、偶一地ニ三鶴ノ遊ベルヲ見、佳トシテ茲ニ住シ遂ニ帰農シテ三觜翁助ト改タメ該地ヲ開拓シテ羽鳥ヲ村名トス、或ハ遠祖ノ新羅ニ出シヨリクレハドリノ旧ヲ襲フト羽鳥村ト号シトモ伝フ」

※26. 御霊神社(ごりょうじんじゃ)

羽鳥村の総鎮守で創立は不明。本来は鎌倉権五郎景政の霊を祀ったものであったが神仏分離により五霊大権現の名を改め、御霊神社となった。

現在の祭神は、神産霊神(かみむすびのかみ)・高産霊神(たかむすびのかみ)・玉積産霊神(たまつめむすびのかみ)・足産霊神(たるむすびのかみ)・生産霊神(いくむすびのかみ)。

境内に至徳3(1386)年の銘をもつ梵鐘があり、市の指定文化財となっている。この梵鐘は、もとは下総の香取神宮の別当であった神宮寺のものであったが、廃仏毀釈で神田の古道具屋に売られたものを、村の人たちが非常時の警報用に購入したもの。ほかに市指定文化財の寛文7(1667)年の庚申塔や道祖神塔がある。

神社の宝物として、小笠原東洋筆の幟が保管されている。

※27. 汲田墓地

もとは、羽鳥村の共同墓地であったが、廃寺になった老梅庵や徳昌院にあった碑や墓石などもここに集められている。

耕余塾を開いた小笠原東陽、二代塾長松岡利紀、東洋の嗣子小笠原鍾の墓及び藤沢の自由民権家平野友輔、三觜本家(大三觜)の墓地などがあるほか鷹山の老梅庵にいた面山の「石字妙経塔」や老梅庵の碑がある。ここにある老梅庵関係

の石造物は、2回も移転されている。



小笠原東洋の墓碑銘の題額は勝安房(海舟)の揮毫であり、松岡利紀の碑銘には、元総理大臣吉田茂の名も見える。墓地入口にある弘法大師像は相模国準四国八十八箇所52番と78番のもの。

※瑞方面山和尚……天保3(1683)年肥後国に生
汲田墓地の小笠原東洋墓付近 まれる。15歳の時母を失ったのを動機に仏門に入る。以後京都建仁寺で示寂するまで、曹洞宗における復学教学の中心として活躍。なかでも『正法眼蔵涉典録』11巻は老梅庵時代の著作。石字妙経塔は、亡父の三周忌追善供養のため小石に一字づつ法華経を書いて埋めたもの。

※ 28. 汲田地名の由来と土地改良記念碑

この付近の水田は、湿地のような状態であぜ道も出来ず、農道も水路もなく周囲の山林も同じ様な状況であった。この地を昭和30年から2ヶ年にわたり土地改良事業を行い区画整理を完成させたことの記念碑。[汲田]の地名の由来は、この地には流れ込む川もなく、水は雨水が頼りであったが日照りのときは田の中に井戸を掘り、汲み出した水を使用したことによる。

※29. 耕余塾跡

明治5年、羽鳥村の名主三贅八郎右衛門は、羽鳥村の子弟の教育の為に、小笠原東洋を招き廃寺徳昌院を校舎として私塾「読書院」を開設した。明治6年にはここに「羽鳥小学校」が開校されたが、読書院もそのまま続けられた。

明治11年入塾者増加のため新しくこの地に新校舎を建て塾名も「耕余塾」と改め変則中学として発足した。そのころ神奈川県下には公立の中学は横浜1校のみで、耕余塾は隆盛をきわめ、卒業生には、平野友輔、武藤角之助、吉田 茂 等の人々がいる。塾生名簿の鶴沼在住者には、「荒木雲泉(万福寺)・伊東エイ(東屋)・高松良夫・高松 縫・齊藤 保」などの名が見える。

※ 30. 逆川流路跡

羽鳥の駒形や丸山の水田の排水のための小川。 関東付近では川は北から南に流れるのが普通であるが、この川は北に流れ、柏山稲荷のところで引地川に流れ込んでいた。そのため逆川の名が生まれた。川は、暗渠になり川筋は道路になっている。

31. もう一つの湘南台

小田急の湘南台以前にあった湘南台地名。第二次大戦の直前、東京の郊外土地KKに拠る宅地開発が始まり、その分譲地に命名した地名。始めは5戸から始まった。小田急の湘南台地名使用によりバス停にのみ名を残すに止まる。

※ 32. 七面地藏

メルシャン藤沢工場正門前の地藏。身代わり地藏とも呼ば

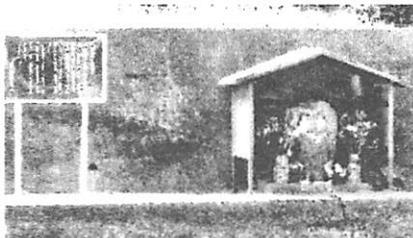




れているが、工場建設の折、敷地内から出た人骨の供養の為に建てられたという。

※ 33.おしゃれ地蔵

前面が白く塗られているので、「おしゃれ地蔵」と呼ばれているが、天明8(1788)年鈴木氏によって建立された双体の道祖神で、地蔵ではない。この像は、女性の願い事は叶えてくれるので、満願のときに白粉を塗ってお礼をしたのでこう呼ばれるようになった。



おしゃれ地蔵

※ 34.養命寺 引地山養命寺(曹洞宗)

本尊の薬師如来は、建久8(1197)年の銘を持つ鎌倉時代初期の作で、昭和2年国宝に指定されたもの。(現在は国重文)ほかに、室町時代の十二神将がある。本堂の天井は信者・檀徒が奉納した絵のはめ込まれた格子天井になっている。

寺の創立は天正年間(1573~1561)頃本寺宗賢院三世天龍和尚の創建による(一説に延文年間(1356~1361)とする説あり)。

35.引地の水車跡

引地橋の北側には、大正時代まで大きな水車があった。3軒の水車小屋があり5台の挽臼と30台の搗臼を動かしていたが、関東大震災の時に破損。

36.柏山稲荷神社

祭神宇迦之魂命(うかのたまのみこと)、稲荷地区の鎮守。創立は保元3(1158)年大庭城主大庭景親が城の護りの為に引地川に堰をつくり、その守護神として勧請したと伝えられる。境内に堰の水門の堰守の任にあった吉田将監を祀る将監稲荷社があり、水門のあったといわれる池の所に巖島千人力弁天社が祀られ、近くにその縁起を書いた碑が建てられている。



(こばやし まさお)

参考・引用文献

- ・新編相模国風土記稿 卷之六十 村里部 高座郡卷之二 ○辻堂村 ○羽鳥村
- ・皇国地誌村誌相模国高座郡 辻堂村・羽鳥村
- ・藤沢の地名と風土 一上一 藤沢市発行 P 7～18
- ・明治公民館歴史散歩資料集 小林政夫
- ・ふるさとまつぶ 明治地区 藤沢市発行
- ・耕余塾と耕余義塾 高野 修 藤沢市文書館紀要 19 1996.3

羽鳥耕餘塾と付近の史跡散策

高田清祐(会員)

6月の例会として辻堂駅そばの明治公民館を出発地点として会員有志による史跡散策会が行われました。新装なった明治公民館2階には市内で初めて設けられた鶴沼郷土資料展示室に習い郷土史料室が開設され、その記念として明治小学校の前身、小笠原東陽による耕餘塾の歴史が紹介されており史料室運営委員より展示品の説明をいただきました。

「耕餘塾」は当事の羽鳥村が貧しい家も多く学問や教養も低く教育の必要性を感じた羽鳥村の名主、三贅八郎右衛門と小三郎家が幼童教育のために、1872年(明治5年)3月元姫路藩の藩士で儒学者であった小笠原東陽を招いて廃寺徳昌院の本堂を学舎として読書院の塾名で開設、私塾として学問を教えたのが始まりで、明治11年3月に新学舎を建てて耕餘塾と改称し教育も内容の拡充を図り中等教育を行うまでに至り耕餘英和学校、耕餘義塾と発展し、後の総理大臣吉田茂や味の素の創業者鈴木三郎助、医者で政治家の平野友輔など



小笠原東陽肖像

送り出し明治30年9月閉塾するまでの25年間で学んだ生徒の数は1000人を超え、その中には鶴沼からの塾生もいたと思われます。明治公民館の2階展示室には読書院、耕餘塾の模型が展示され興味深い内容となっております。

公民館を出発し、当会の会員小林政夫氏の詳細な説明を受けながら、かつて羽鳥村全体の共同墓地であった汲田墓地で耕餘塾長の小笠原東陽、二代塾長松岡利紀、藤沢宿に最初にキリスト教を導入した平野友輔の墓、相模国準四国八十八ヶ所52番と72番の大師像、廃墟となった老梅庵、徳昌院の碑などを見学し、羽鳥村の鎮守社である御霊神社を経て大三贅家に向かいました。戦国時代大阪城落城後羽鳥で帰農し原野の開拓、植林などに尽くし羽鳥村を富ました本家当主の八郎右衛門は羽鳥村の3分の2を所有していたといわれ、耕餘塾と小笠原東陽住居跡、



汲田墓地の小笠原東陽を見学

読書院跡、師範学校跡等を見学するにつれその広大さが推し量れました。

砂地のため井戸を利用した汲田地名の由来、藤沢では通常川は北から南へと流れたのが逆川の存在等興味深い説明を受け、子供時代引地川を渡って砂地を苦労しながら自転車を引いて行った記憶のある羽鳥地区の砂丘の大きさ広さを改めて

実感させられました。

最後にメルシャン藤沢工場正門前の七面地蔵を経てその斜め向かいにある女性の願い事を叶え満願のときに白粉を塗ってお礼をしたおしゃれ地蔵を通り国指定重要文化財のある養命寺を見学後、引地橋を渡り散会となりました。

(たかだ きよすけ)



羽鳥村の名主だった三觜家の正門

カイ 楷ノ木 — 鵠沼にも

鈴木三男吉（会員）

まず会員の方々にお知らせしたいことがあります。

藤沢市立鵠沼中学校が今年創立60周年を迎えるにさいし、楷(カイ)という木を記念植樹して下さったことです。私はこの楷ノ木が鵠沼の安定性のある場所に植えられることを永い間願っておりましたので、大変嬉しく人生最後の願いが叶った想いがしています。改めて校長をはじめ教職員の方々に厚く御礼を申し上げます。

× × ×

すでに多くの方の知るところと思いますが、この楷ノ木は昔から日本にあった木ではなく、大正4年に原産地中国の曲阜という町から種子のまま渡来してきたのです。当時東京目黒にあった林業試験場の場長をしていらした白澤保美博士が中国山東省の青島(チンタオ)に出張のさい曲阜まで行き、孔子の墓所の周辺に落ちていた種子を拾い集めて持ち帰り、試験場で播種・育苗しました。これが日本に生まれた最初の楷ノ木です。

今から2500年も前、儒学の祖孔子がこの世を去ったとき、弟子たちはそれぞれの地方の名木を多数持ち寄り墓地の周辺に植え、今日孔林または聖林といわれる林をつくり、その中の小さな庵で3年間の喪に服しました。このとき弟子の子貢が持ってきて植えたのが楷という木で、子貢は他の弟子よりも3年永く喪に服し、後事を楷ノ木に託してここを立ち去ったと伝えられています。楷ノ木はそれ以来今日まで絶えることなく代わる代わる孔子の墓を見守ってきました。

漢籍に詳しい白澤博士は、このような有情の木が植えてあることはもちろん、今頃は種子も落ちていることを十分承知して、曲阜まで足を伸ばされたものと思います。

日本で楷ノ木が一般の話題となった原点は、東大教授東畑精一氏が昭和32年3月、日本経済新聞に、ご自分の家にある楷ノ木の歴史を「天国の木の来歴」として紹介され、これを読まれた第一生命の矢野一郎氏が同じく日本経済新聞に「わが家にもある<天国の木>の物語」を書かれ、多くの読者が楷ノ木に対する関心

を高めたことにあると思います。私も実はそのうちの一人なのです。私の読んだ時期はこれから30年以上あとの平成初期ですが、東畑先生が還暦記念論集『一卷の人』にそれらの記事を一括して「楷樹（かいじゅ）物語」として入れておかれたので助かったという次第です。珍中の珍木として裸一貫で渡来した楷ノ木に魅了され、その戸籍調べに約一年間を費やしました。そしてその結果を「楷ノ木巡礼」（平成4年3月初版、平成6年4月改訂）という短篇にまとめてありましたので、若干修正して掲載することに致しました。何かご参考になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の記念植樹について、元会員で鶴中の卒業生である圓山氏に大変お世話になりました。有難うございます。（すずき みおきち）

「楷」の木巡礼

—戦前渡来のルーツを調べて—

鈴木三男吉

去る平成三年十一月二十二日、私は最後の楷の木巡礼のため浜松に向かった。静岡県立女子短期大学にある楷の木を見るためである。ここの楷の木は、楷の木への関心を高める発端となった故東畑精一博士邸の楷の木の唯一の兄弟で、寄贈者浅見与七博士もすっかり失念していたところ、寄贈先野原茂六氏からの手紙によって初めて思い出したという幸運な楷の木である。

あらかじめ電話で所在を確かめておいたので無断でキャンパスに入って探そうと思ったが、胡散臭い男ととがめられてはいけないと思い事務所に立ち寄って来意を告げた。ところが楷の木はこの短大キャンパスではなく、地続きではあるが隣の静岡大学教育学部付属浜松中学校のキャンパスにあるという。分かり難いからご案内しましょうというご好意を丁重にお断りして、教えられたとおりにいったん校門を出てフェンスに沿ってしばらく行くと、人家の途切れた垣間から木立のなかに一際目立つ真紅に紅葉した比較的小さな木が見えた。それに間違いのないと思ひ少し先の中学校の裏門から入ってみると果してそうであった。これで楷の木の巡礼の最後を果たしたわけだが、正直に言ってこの楷の木はあまり幸せそうではなかった。もちろん説明書の立札はあったが、建築上邪魔になった他の立木の仲間に入れられ、キャンパスの隅にごった植えにされている感じであった。国有地の広いキャンパスといえども、樹木にとっては決して安住の地ではないほど世

知辛い世の中になったことをしみじみ感じた。まして個人の屋敷においておやである。こんどの楷の木巡礼においても個人に贈られたものは、ほとんど例外なく移植によって枯死している。ここの楷の木は数回移植されているが、幸い持主の適切な判断によって最後には学校に寄贈されたので命脈をたもつことができたといえる。

五月三日の金沢文庫から始めた私の楷の木巡礼は、湯島聖堂、多磨霊園（岩村家、稲垣家の墓地）、渋沢史料館、浦和市立老人公園（旧制浦和高校・埼玉大学）、矢野一郎邸（蒼梧ハイツ）、林試の森（旧目黒林業試験所）、鈴木恒五郎邸（旧鈴木吉五郎邸）、乃木神社、第一生命本社（足柄下郡大井町）、井の頭自然文化園、小石川植物園、東郷神社、新宿御苑、広池学園（千葉柏市）、足利学校、そして今回の浜松で一応終ることになったが、機会があれば有名な閑谷学校、多久市聖廟、熊本大学医学部付属病院、そしていわき市の安養寺まで足をのぼし、戦前からの楷の木すべてとの対面を果たしたいと思っている。

私が楷（カイ）という木の存在を知ったのは、「楷書」の「楷」という字の意味を漢和辞典で調べたときであるが、実際に「楷」の木と対面したのは数年前、親戚の結婚式が乃木神社で行われたときのことである。そのときの楷の木は辞書の説明にあるとおり、不器用ではあるが枝が真っ直ぐに伸びた、いかにも下手な楷書らしい姿をしていて成るほどと思った。しかし、私が最初に引いた辞書に正しい解説がしてあったので楷の木との対面ができたわけだが、漢和辞典のなかには、「楷」の解説が「桧に似た常緑樹」となっているものもあるので、もし遅くこの辞書を最初に引いていたら、生涯楷の木を知らずに終わったかも知れない。

昨年春、書物の整理をしていたさい、かつて東畑精一先生からいただいた先生の還暦記念文集『一卷の人』をなんとなく繙いているうちに目に止まったのが「楷樹物語」である。神奈川県の大木・名木巡りを一通り終え次の目標を探していた矢先のことで、即座に「楷」の木に飛びついたのである。

そこでこの「楷樹物語」を手がかりとして、鈴木三八男『聖堂夜話』、浅見与七博士の『学士会会報』に書かれた「楷樹——特に本邦への渡来と所在——」、上原敬二編『樹木大図説』などを読ませていただき一通りの知識を頭に入れたが、諸先輩のこれらの労作はいずれも二、三十年前のかかなり古いものであり、必ずしも戦前からの楷の木すべての由来が解明されているわけではないので、自分なりにこれを調べてみようと思い立ったのである。疑問点については直接現場をたずねたり、或は関係者の所在をつきとめ書面で照会したりしてみたが、結論的に言

えば個人としての限界があり、あまり成果はなかった。

ただ現在第二世代の親木（雄）として活躍している旧鈴木吉五郎邸（現鈴木恒五郎邸）の楷の木が、昭和の初め当時小石川植物園の主任をしておられた松崎直枝氏から贈られたとされているが、この他に寄贈先があるかも知れないと、松崎氏のご子息松崎直介氏を探し当てお尋ねしたところ次のような意外な返事をいただいた。松崎氏が持ち帰った楷ノ木の種子は二度にわたっており、昭和二年五月ソ速クリミヤ半島のニキタ植物園から種子を持ち帰り、これから生じた苗木の一本が新宿御苑に寄贈された。

二回目が昭和十七年中国曲阜から持ち帰ったもので、鈴木吉五郎氏に寄贈された。したがって小石川植物園にはそれぞれ一本ずつあるはずだが実際には一本しかない。この一本がどちらであるか、小石川植物園にもこの点の記録はない、新宿御苑に贈られた楷の木も現存していない。いつどうなったかの記録もない。

また第二世代の雌の親木として活躍している湯島聖堂・金沢文庫の楷の木の寄贈者大村興道氏（旧姓鈴木）がまだご健在なので、この他に寄贈された先はないか書面でお尋ねしたところ、東郷神社、高田真治先生、宇野哲人先生、塩谷温先生などにも差し上げたが、現存するものはなく、いわき市の安養寺に一本残っているだけだというご返事があった。この安養寺とは、大村興道氏の兄上が住職をされていたお寺で、ここを通じてたまたま檀家であった翠香園にこの種子の播種育成を依頼した縁故である。この翠香園は現在は廃業されているが、当時の園主鈴木金一氏の子息鈴木隆氏は八十八歳でご健在とのこと、なお広池学園の楷の木とは関係がないということであった。

また現在浦和市立老人公園（もと旧制浦和高校・埼玉大学）にある楷の木については、昭和四十七年九月三十日の『毎日新聞』埼玉版に元埼玉大学教授江森貫一氏の記憶として報道されているように、大正十年頃中国に留学された旧制浦和高校の漢文の教師（江森氏はこの教授の名前を失念されたという）が持ち帰った種子を白沢博士が場長をされていた目黒の林業試験場に依頼して播種育成してもらったものであるといわれている。江森貫一氏は昭和三十七年退官されたが、現在（平成四年一月末現在）まだご健在なので、改めてお尋ねしたが、何分にも九十四歳のご高齢なので、やはり記憶がないというご返事であった。

この楷の木については、埼玉県知事畑和氏が、平成元年七月十五日の『日本経済新聞』に一文を寄せ、「いろいろ調べてみたが、そうではない、白沢保美という林学博士に寄贈してもらったらしい」とされているが、地元のことでもあるし、

もっと詳しく調べてみる必要があると思う。

【追記】旧制浦和高校の楷の木の由来については、『旧制浦和高等学校同窓会報』（第54号、1992.9.20）に同窓生栗山 実氏（25回理4）によって詳しく考証されており、江森氏の初期の記憶にある「大正期の漢文の教授」とは、同校教授第1号で東洋史・地理を担当された竹村昌次氏と考えるのが妥当ではあるまいか、とされている。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

以上のほか先輩の調べられた成果に付け加えることは何もないが、戦前における種子の渡来とそれから育てられた楷の木の所在とを改めて整理すると、次のとおりである。

1. 白沢保美博士の持ち帰ったもの

大正四年三月、農商務省林業試験場長白沢保美博士が中国出張のさい、山東省曲阜の孔子廟に植えてあった楷の木の老樹の種子を持ち帰り、目黒の林業試験場で下種、苗木を育て、それを孔子に関係ある各方面に寄贈されたのがわが国における最初である。その楷の木が現存している寄贈先は次の通りである。

- ① 本郷湯島の聖堂（五本のうち杏壇門の左右にある三本、いずれも雄木）
- ② 足利市足利学校（一本、大正十一年）
- ③ 岡山県閑谷学校（二本、渋沢栄一氏の女婿明石照男氏による）
- ④ 乃木神社
- ⑤ 佐賀県多久市聖廟（一本、造士館に贈られた二本のうち的一本、大正十四年）
- ⑥ 目黒の林業試験場（現在は「林試の森公園、四本、しかしここではその後ルートの違う種子を別に育成しているので、この四本全部がそうであるか否かは判らない。つくばの研究所に移したともいわれている）
- ⑦ 井の頭自然文化園

このほか戦災で焼失したか枯死したものは次のとおりである。

- ① 当時大森新井宿にあった矢野恒太郎、その後昭和二年田園調布への転居のさい一緒に移植、嗣子矢野一郎氏によって大切に保存されていたが数年

前枯死。この楷の木が植えてあった矢野邸の一部は現在蒼梧ハイツとなり、そこに若木が植えてある。なお矢野一郎氏はこの枯れた楷の木をテーブルにつくり世田谷烏山の矢野記念館に保存されている。

- ② 飛鳥山の渋沢栄一郎、現在は渋沢史料館となっているが戦災で焼失した。現存する四本の楷の木は、鈴木吉五郎邸の雄木と金沢文庫の雌木との交配によって昭和四十年に生まれ、国産二世の第一号である。
- ③ 当時の農商務省次官鶴見左吉雄邸（当時青山）
- ④ 鹿児島造士館第七高等学校、大正十一年十一月に白沢博士によって二本贈られたが一本は佐賀県多久市聖堂に寄付され、残った一本は昭和二十年六月空襲のため焼失した。

2. 旧制浦和高校の漢文の教師の持ち帰ったもの。

前述のとおりであるが、浦和中学校にも同時に植えられたが、この方は校舎移転のさい伐採された。

3. 小石川植物園松崎直枝氏の持ち帰ったもの。前述のとおり。

4. 道徳科学専攻塾に曲阜から贈られたもの。

昭和十年四月、震災で焼失した湯島聖堂の再建の式典が、孔家、顔家の代表を招いて盛んに行われた。この式典の終わった五月三日、広池千九郎博士は千葉県柏市に新しく開設した道徳科学専攻塾（現在の広池学園モラロジー研究所）にこれらの代表を招いた。このときの縁で翌年楷の木の種子が送られてきた。それを播いたところ五本発芽したので、そのうち四本を学園に植え、もう一本を土地の提供に協力された斎藤家（北小金）に贈り現在に至っている。学園にある四本のうち二本が雌木ですでに種子ができ、これからの苗木が育っている。

5. 大村興道氏の持ち帰ったもの。

前述のとおり昭和十二年、当時東大の学生であった鈴木興道氏（のち大村家の養子となる）が高田真治教授に引率され、十三人で山東省曲阜の孔子廟に詣でたとき持ち帰ったもの。ここから生まれた楷の木が金沢文庫に一本（雌）、湯島聖堂に二本（雌雄一本ずつ）が立派に育ち第二世代の親木として活躍している。大村氏は現在杉並区方南の東運寺（釜寺）の住職をしておられる。

6. 東大農学部教授浅見与七博士が持ち帰ったもの。

昭和十五年十月、中国曲阜の孔子廟から持ち帰った種子を翌年春自宅に播いたところ発芽したので、そのうち一本を同じく農学部教授東畑精一氏に贈った。立派に成長していたが、移植したため残念ながら枯死した。また当時駒場にあった東大農学部勤務していた野原茂六氏にも寄贈されていた。これは野原氏の勤務先である旧制水戸高校（現茨城大学）への転勤と共に移植され、更に定年後に帰った郷里浜松にも移されたが、なお健在であることは前述のとおりである。

7. 南京政府の成立記念として贈られたもの。

昭和十六年、南京政府の成立を記念して楷の木の種子が多量に日本政府に贈られ、これを秋田、高知営林署に委託して播種育成させたが、現在残っているものはほとんどないとのことである。この間の経緯は浅見与七博士の書かれた『楷樹——特に本邦への渡来と所在——』（学士会会報第三二八号、昭和五十年第三号）に詳しい。私も改めて手紙で照会してみたが、それ以上のことはわからなかった。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

以上、戦前わが国に持ち帰った楷の木の種子の由来は七通りであると思われるが、いろいろな資料を読んでいくうちに腑に落ちない点が出てきたので、どなたかお詳しい方がおられたらご教示いただければ幸いです。

まず、植物図鑑類の「カイ」の記述に相違が多すぎることである。学名からして *Pistacia chinensis* Regel と *Pistacia chinensis* Bunge とがある。和名もトリバハゼノキ、トネリバハゼノキ、トネリコバハゼノキなど、またカイはランシンボクの別名とするもの、異種とするものなどがあり、どれが正しいのか。

つぎに松崎氏がクリミヤから持参した種子から小石川植物園で育成されたうち1本は園内に、1本は新宿御苑に移されたと同植物園の記録にあるそうだが、事実関係はどうか。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

最後に私の読ませていただいた諸先輩の労作を列挙してお礼の代りとして。とくに多久市役所に勤務されている服部政治氏からは偶然の機縁で氏の労作『孔子ゆかりの樹木（楷・杏）について』をお送りいただき、多くの教示をえたことをここに特記して感謝の意を表したい。

楷の木に関する文献

1. 東畑精一「天国の木の来歴」日本経済新聞、昭和三十二年三月二十五日
2. 矢野一郎「わが家にもある<天国の木>の物語」日本経済新聞、昭和三十二年四月一日
3. 朝比奈貞一「日本では珍しい<楷>の木」サン新聞、昭和三十二年五月二十六日
4. 矢野一郎「楷の木後日物語」日本経済新聞、昭和三十二年六月十五日

以上の4篇はのち東畑精一『一卷の人』（昭和三十五年三月、非売品）に「楷樹（かいじゅ）物語」として収められている。

5. 矢野一郎「孔子木の嫡孫」日本経済新聞、昭和四十二年十一月二十六日
6. 矢野一郎「“孔子木”後日談」日本経済新聞、昭和四十三年四月三十日、これには朝比奈貞一氏の付記が添えられていて、このなかで金沢文庫の楷の木の由来が明らかにされている。

以上の2篇はのちに鈴木三八男編『聖堂夜話』（昭和四十八年十一月、斯文会発刊）に収められている。しかし再録に当って付記の一部が削除されている部分もあるので双方を参照する必要がある。

7. 毎日新聞埼玉版「カイの木も“はばたく”」一孔子廟から持ち帰った種子、いま五十年、そびえたつ——（昭和四十七年九月三十日）。
8. 浅見与七「楷樹一特に本邦への渡来と所在——」学士会会報、七二八号、昭和五十年第三号。
9. 畑和「カイの木何の木“歓びの木”」日本経済新聞、平成元年七月十五日
10. 上原敬二編『樹木大図説』全四巻、有明書房、昭和三十六年
11. 服部政治「孔子ゆかりの樹木（楷・杏）について」（私家版）
12. 関根透「孔子を慕う子貢の楷ノ木」（「鶴見大学紀要」第三十号第四部人文・社会自然科学）、平成五年三月

カイという木について

ウルシ科。落葉喬木、雌雄異株。樹高 20 ㍎、幹径 1 ㍎に達する。中国原産、台湾 フィリピンにも産する。4,5 月ころ円錐花序のあまり目立たない小さな花をつける。10,11 月ころ紫黒色の顆粒状の実をつける。葉は偶数羽状複葉、ときに奇数葉が混じる。秋、紅葉がとくに美しい。



鵠中の記念樹

湯島聖堂の楷の木

上：雌木

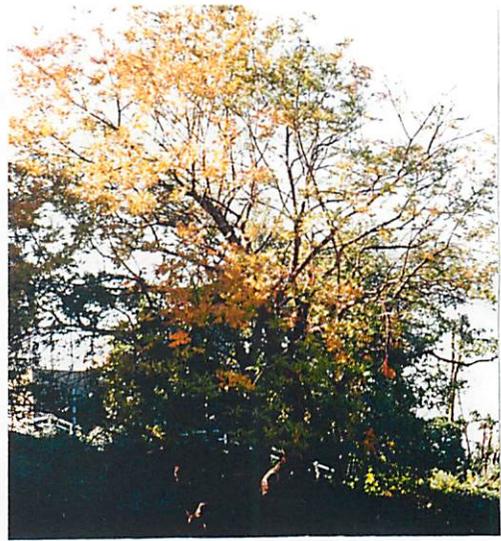
右：雄木

鵠沼中学校創立 60 周年記念樹はこの木の種子から育てられた。いわば記念樹の両親である。





金沢文庫(雌木)



鈴木恒五郎邸(雄木)



足利学校



乃木神社

小説 秋の蛇

今井達夫

屋敷と屋敷とのあいだに荒けずりの道があって、その先に川面が見えた。曲り角で立ちどまった青木は川が見たくなって、突いているステッキに重心をかけ姿勢の向きをかえた。

荒けずりの道を十五メートルほど進んで行くと、川岸に出た。はじめ対岸の草堤と人家の屋根とその上にはるか向こうの丘陵の一部しかなかった視野がひろがり、川の全貌を長くつづいた草堤とそして左右に伸びている丘陵地帯が目にはいつて来た。新秋の季節を教える罫雲のうすくうかんでいる空が大きくひろがって来た。

青木は目をみはった。随分長く訪れなかったこの川べりは、予想もできなかったほど変貌している。左手で大きくカーヴしている姿はほとんど昔のままだが、対岸の草堤のあちら側には屋根がかさなりあうほど住宅が立ちならんでいる。はるかな丘陵地帯も宅地造成をやっている、むきだしになった赤土の肌が午後の日射しに染まっていた。

向う岸は草堤だから昔のおもかげをいくらか残しているが、青木の立っているこちら側は上から下まで目のとどくかぎり、ゆるやかな傾斜のコンクリート護岸施設がつづいていて、密生していた芦の群の姿は影も形も消えうせてしまった。一体、何年ぶりでこの川岸に立ったろう。かぞえるまでもなかった。戦後二十年はじめてである。護岸施設のコンクリートの古びた色は当然であった。

護岸の上に一メートルに足りない幅の道がついている。青木はしばらく立ちどまっていた足を、下流へ向って歩き出した。すると、昔のこちら側の風景が目にかかれば、忘れていた感傷が誘い出された。この川はすぐ海へそそいでいる。下流の方に釣舟宿があって、和船やボートを貸した。和船の好きな青木はハイティーン時代それを借りて、海に出るかわりに上流へ漕ぎあげ、船底に寝そべって流れにまかせたことがかぞえきれないほどあった。

舟はゆるやかに流れ、このあたりの芦の茂みにただよいつく。仰向けに寝そべっているから、夏の空も秋の空も四季それぞれの空が青木の目にきざみついてい

る。目をとじると、芦の群たちのさやぐ音がひっそりと聞えて来た。

青木の家が父の療養生活のために横浜からこの海岸町へ移って来たのは昭和のはじめで、彼のハイティーン時代といえは十年代の半ばからはじまる。事変、戦争と進むにつれ住むひと多くなつたが、避暑客たちも来る時期であつた。海岸で知りあつた日時代のなかには、心やさしい少女もいたし勝気で頭の回転のはやい娘もいた。青木が大勢のなかでそのふたりの異性を特におぼえているのは、ふたりが対照的な顔だちながらともに美貌の持主だつたからであろう。

青木は海岸町の小学校中学校から日吉に予科のあつた私大に進み、やがてはじまつた戦争に駆り出された。そのころには長兄も次兄も応召し、青木と前後して東京の姉の良人も応召して、姉の家族は疎開の目的で実家へ引き上げて来た。次兄は戦死したが長兄と彼は復員することができ、姉の良人も無事であつた。青木の気持ちをひいたふたりの少女の消息は戦争の混乱とともに消えたが、強いて探し求めなかつたのは恋愛と呼ぶまでの交渉がなかつたからであろう。

かの女たちの記憶がよみがえつたのは川を見たのが機縁になつたからだが、また、家を出て来がけに妻とすこしばかり云いあらそつたことも影響していた。結婚生活十五年をこえた妻は、悪気を含まないにしても彼を家庭にしばりつける権力を当然みたいに持ちはじめた。夫婦のあいだにふたりの子供がある。日曜の夕食くらい子供たちと一緒にしてもいいではないかと、妻は云いたてた。今日のはじめのことではなく今まで幾度もくりかえした主張で、青木ももつともだとは思ふが、同じ市内ながらとなりの海岸町に住んでいる先輩の招きにはことわりなくいい理由があつた。

妻の語気が今日は特別つよかつたので、青木は予定よりはやく家を出た。いつもは海岸ドライブウェイのバスに乗る順路を使うのだが、時間があまつたので散歩の道を伸ばしたのである。これから訪ねる江口は中学も大学も十余年先輩であるばかりでなく、青木のつとめている会社と同系列会社の重役である。行けば碁をうつことになり、帰宅がおそくなるならわしだが、青木は招かれることにある含みがあるとうけとつていた。江口の会社に引き抜かれれば、将来について有利な保証があたえられることになる。盤に向うことは一種の人物試験であろう。招きがつづくあいだは希望を持っていいわけであつた。最終的には形式的にせよ意見を求めるつもりだが、まだその段階に立ち到つていなかつた。ほのめかすことで希望を持たせては、逆目に出た場合の反動が煩わしい。それを知らないからいい顔をしないのも無理はないが、今日は特に後味がわるかつた。はるか昔の海の

仲間の少女たちを思い出した経路には、その後味が作用したといえるだろう。

護岸の上のせまい道を二百メートルほどくだったところに、青木のめぐる橋がある。途中まで来たときだった。静かな空気をつんざいて、対岸からソプラノの悲鳴がひびいて来た。反射的に振り向くと、草堤から川へむかって跳躍する女の姿が目にはいった。距離があるからはっきりわからないが、花模様のワンピースを着ているから若い女にちがいない。女は一瞬空中にとどまったみたいに見えたが、すぐ両手をひろげた格好で垂直に川面へ落ちた。花模様のスカートがふくらんでまくれあがり、白い腿のほとんど付け根まで、ぴっちり喰いこんだ水いろのパンティとともにあらわになった。

不意の出来事は青木の足を釘づけにした。水面に突き刺さった女は一度沈み、うきあがろうともがきながら流れて行く。助けなければなるまいと思ったが、こちら側からは距離が遠すぎた。見まわしたが生憎人影がなく、目撃者は彼ひとりだ。大きな声を出そうとしたとき、対岸の草堤の上に三人の男があらわれ、ひとりがズボンを脱ぎすてながら斜面を駆け下り、川へはいった。大した深みではなく、腰のあたりまできりなかった。男は呼吸をはかって手を伸ばし、女の手をつかまえて立ちあがらせた。何かいったようだが、青木の耳まで意味はとどいて来なかった。立ちあがった女は男の手につかまりその胸に倒れかかったが、男は背に腕をまわし岸まで誘導した。青木はほかの男たちが手を貸して引きあげるところまで見て、歩き出した。

長い木橋の手前で向う岸の情景がかくれ、木橋にさしかかって目をやると、草堤の上の人数は七八人にふえていた。どうも理解しかねる出来事だった。橋をわたると時計を見てから、青木は草堤の上の小径へまがった。そこにはすでに女の姿はなく、ズボンを脱いだままの青年がまだ興奮の色をのこして中心になっていた。

「どうしました？」

「女が川へとびこんだのですよ。それをこのひとが助けたのです。」

別の男が青年を目で指しながら、青木の質問に答えた。

「どうしてとびこんだのでしょうか？」

「それがわからないんですがね。しきりに蛇が蛇がといていたが—」

「蛇？いや、実は向う岸を歩いて来たら、いきなり悲鳴を聞いて— 気になったものですから」

「え？あなたは見たんですか。」

「見ました。悲鳴を聞いて振り向くと一」

青木はいくらか弁解気味な語気で、今しがたの光景を説明した。今度は青木が中心になった。

しばらくののち、青木はそのひとたちにわかれを告げて、江口の家へ向った。こちらからも随分質問したが、結局要領を得ずじまいであった。

若い女は草堤の下の小さいけれど気のきいた洋館に住んでいる若夫婦の細君で、知らせに走ったが良人は留守だった。戸じまりがしてなかったから別に外出するつもりではなくて、なんとなく草堤にあがってみただけにちがいないという。そして、蛇を見て川へとびこんだというのだが、おかしな話である。逃げるなら反対側、家のある方へ下りるのが当然である。しかし、悲鳴には必死の響きがこもっていた。蛇はそちら側から這いあがって来たのであろうか。駆けつけて来たひとたちは蛇の姿は見なかったといった。あるいは、驚いたのは蛇の方で、いそいで逃げ出したのかも知れない。

泳げないのかなとひとりがいうと、それはわからないが夏のあいだビキニ・スタイルで海へ行くのを見たと言明する者がいた。見たのはその男だけではないらしい。可愛らしいへその持主だったなというときすぐったそうな笑い声が湧いた。とにかく腰のへんまできりないところでもがきながら流されたのだから、動揺したことは疑うわけに行かない。噛まれたかどうかがわからないが医者のところへつれて行ったという。このへんには蝮はいないはずだという者もいた。青木が聞いたのはそんな断片でしかなかった。要領を得ないが時刻もせまったし、へその話で空気がなごんだところで青木は歩き出したのである。

江口の家では例によって黒白をあらそい、夕食をご馳走になって夜ふけから車で送られた。妻は出がけの不機嫌をのこして、同じ言葉をくりかえした。マイ・ホームなどという言葉が発生する以前に育っているくせに、単純な性格として家庭本位の態度を堅持しているのである。うるさくなって来た青木は、招かれて江口を訪ねるのはそして彼が応じるのは、碁を打つだけではなくほかに含みのあることを洩らした。妻は単純にその話題に熱中し目に輝きをそえた。

「しかし、まだ確定どころか具体的な話をうけていないのだから、君の胸だけにおさめて誰にもいわないでもらいたいね。」

「もちろんよ、邪魔がはいらるといけないもの。でも、それならもっと早く教えてくださればよかったわ。江口さんへうかがうこと、決して文句は申しません。どうぞ、しっかりやって。うまく行くといいわね。」

不機嫌はさらりと消えた。

翌月曜、取引先を招待する宴席があつて、青木は遅く帰宅した。

「お先にいただいたけれど、お風呂どう？」

「ウン、はい。」

昼は残暑で汗をかくが、日が暮れると涼しい海風が網戸からはいって来るのは、海岸町の恩恵である。茶り間に胡座をかいて冷えたビールを飲んでいると、妻が眉をひそめながら

「厭アね、蛇なんて。うっかり散歩もできないわ。」

「蛇？ なんだいそれは。」

「ごらんなさい。」

差し出した夕刊の湘南版に目を落とすと、若妻集団蛇におそわるという見出し記事が囲みものになっていた。忘れるというほどではないにしてももうすんだことと思っていた昨日の出来事が、あざやかに生きかえって来た。

記事によると、あの若い女をおそつたのは一尾ではなかったらしい。数尾の蛇がからみあうようにしながら、かの女の足もとにまつわりついたという。あとは青木が目撃し、聞いた通りであった。なるほど、これではあの悲鳴とともに川へとびこんだ行動もうなずくことができる。

「これはまいるな。」

「でしょ？ でも、どうして川へとびこんだのかしら。うちへ駆けこめばこんな騒ぎにならなかったのに。」

「蛇の連中そっちから来たんじゃないのか。」

「そうね。そう考える以外ないわね。」

「おかしいことだ。しかし、これじゃ、悲鳴をあげても仕様がなさ。」

「あら、悲鳴なんて。そんなこと書いてないわ。」

「実は、女がとびこむところを偶然見かけたんだ。」

「あら、昨夜そんなことおっしゃらなかったじゃなくて。それで、どんなふうでしたの？ あなた助けておあげにならなかったの？」

妻は膝を乗り出した。

「向う岸の出来事なんだぜ。」

青木はここでもいづらか弁解気味に、説明をくりかえさなければならなくなった。しゃべっているうちに、空中でパラシュートのようにふくらんだスカートの奥の白い腿の付け根までが目にうかんで来たが、青木の常識はその描写を口のな

かで噛みこころした。

「すごいわ。でも、蛇はどんなつもりで集団になったのかしら。」

「さあ、そいつは蛇に訊け、だね。」

「訊いてみたいの。」

妻は目を空中にこらした。

「—でもね、もしかしたら、そのひとあれだったんじゃないのかしら。」

「あれ、とは？」

「厭アね。でも、蛇ってそういう匂い敏感に嗅ぎつけるんじゃないかしら。厭アね。」

妻は同じ言葉を別の意味で使って頬を染めた。青木は珍しいものを見る気分で、妻を見直した。食卓に肘をついて横座りになっているので、二の腕があらわになっているばかりでなく、胸もとがすこしはだけて乳色の肌も覗いている。もともと白い皮膚の持主で、今夜は紺地の湯上りをきているから、対照的に白さが際立つ。

「珍しいものを着ているのだな。」

「たまにはいいでしょ。あら。」

視線をもどした妻は青木の視線のそそがれている場所を知って、反射的に襟に手をやった。

「いいじゃないか、隠さなくても。」

青木はひょいと手を伸ばして、肩を引き寄せた。妻はびっくりした目で青木を見たが、逆らわずに、むしろ意識的に倒れこんで来た。青木は目の下にある妻の今しがたよりもっと紅味の加わった耳朶にささやいた。

「May 1？」

「Why not？」

単純な性格だが、ミッション出の甲斐があって、すぐ気の利いた返事がかえって来た。

「Thanks.」

青木は耳朶をやわらかく噛んだ。

「あ、そういえば、さっき東京のおねえさまからお電話があつて—」

「いいじゃないか、そんな話。こういうとき余計なことというものじゃない。」

青木は苦笑いを噛みこころした。すこしさめた気分である。

(いまい たつお 小説家 故人)

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成19年4月～平成19年9月)

総務部

運営委員会 3月27日(火) 10名出席

平成19年4月例会 4月10日(火) 10時～12時 23名出席

議題1 会誌「鵠沼94号」配付について - 出席した会員に手渡し、他は配付表に基づき担当者に依頼した。

議題2 会のホームページについて - 従来は杉本会員個人でプロバイダーと契約・管理してきたが、今後は会の名義とし、新たなプロバイダーと契約することにした。また、掲示板の設置も検討したい旨の報告がされた。

議題3 今井達夫氏未発表作品の整理について - 未亡人の了解が得られ未発表原稿の活字化ができるようになった。その一つを、会誌「鵠沼94号」に掲載した。

議題4 その他 - 嵯峨景子さんが、東大の修士課程を終了し、博士課程に進学した。「内藤千代子」について未発表の作品があったので、そのお話をしたい旨の報告があった。

お話 - 「中岡耕地整理紀功碑」について、渡部瞭会員より、解説のリーフレットとパワーポイントによるビジュアルな説明があった。終了後、センター裏庭に移設された記念碑を見学した。

運営委員会 4月24日(火) 11名出席

第21回総会・5月例会 5月8日(火) 10時～12時 27名出席

第21回総会 - 冒頭に有田会長、続いて平綿鵠沼市民センター長の挨拶があった。その後、別紙「第21回総会議案書」審議を行ない、原案通り全会一致で承認された。内藤新会長の挨拶により閉会した。

平成19年5月例会

お話 - 『楷の木』について、鈴木会員より長い年月にわたり、収集された情報および調査の結果について話していただいた。

運営委員会 5月29日(火) 12名出席

平成19年6月例会 6月12日(火) 10時～12時30分 26名出席

議題1 運営委員会について 次回報告することとした。

議題2 今年度のプロジェクトについて - 今井達夫資料の整理、所蔵資料の整理、文化人展の冊子発行等運営委員会で決めることとした。

議題3 6月19日開催の 史跡巡り「羽鳥耕余塾と付近の史跡」について当日の予定が案内された。

議題4 その他

(1) 例会の案内通知について 手渡方法を変更した内容を説明。

(2) 会誌95号について 構想の内容を説明。

(3) 公民館祭りについて 参加する旨の報告。

(4) 語る会への案内等 会長変更に伴い修正した旨報告。

お話 - 内藤千代子と『女學世界』について東京大学 大学院博士課程の 嵯峨 景子(さが けいこ)さんが研究され、修士論文にまとめた内容の一部を講演された。

史跡巡り - 6月19日(火)「羽鳥耕余塾と付近の史跡」 14名参加
明治市民センターにて羽鳥耕余塾関係の展示を見学し(参加14名)、その後羽鳥地区の史跡を巡った。(参加12名)

運営委員会 6月26日(火) 11名出席

平成19年7月例会 7月10日(火) 10時～12時 18名出席

議題1 運営委員会について - 分担が発表された。各部会長は次の通り。
(敬称略) 企画：有田、 総務：中島、 会計：高田、 編集：岡田、 ホームページ：竹内。

議題2 今年度のプロジェクトについて - 各チーム長を中心に進めて行くことが発表された。

(1) 所蔵資料(塩沢文庫関係)整理 チーム長：佐藤(和)

(2) 今井達夫資料整理 チーム長：岡田

(3) 文化人展の冊子発行 チーム長：渡部(瞭)

(4) 鶴沼『会誌』データベース化 チーム長：岡田

議題3 6月19日開催の 史跡巡り「羽鳥耕余塾と付近の史跡」報告

議題4 会誌95号 について - 進捗状況が報告された。

議題5 その他

(1) 旧後藤医院その後の進展として、藤沢市が借上げることが報告。

(2) サークル交歓会の結果報告。

(3) 鶴中「鶴祭」への参加予定の報告。

お話 - 「知っておこう鶴沼の災害」(鶴沼郷土資料展示室で展示中)の内容を、内藤会長および、渡部(瞭)会員が説明・解説された。

運営委員会 7月31日(火) 12名出席

平成19年8月例会 8月14日(火)10時～12時 22名出席

議題1 9/22鶴中の「鶴祭」への対応 - 『楷の木』の由来、解説等と開校当時の写真提供を企画委員中心に行なうことが報告された。

議題2 公民館祭りについて - 展示テーマは『楷の木』および、鶴沼で育った作家にする方向で検討中であることが報告された。

議題3 会誌「鶴沼」95号の内容について - 記載内容案の報告がされた。

議題4 その他

(1) 塩沢文庫の資料を整理していく旨の報告がされた。

(2) ホームページフリーメール方式検討の旨報告がされた。

お話 - 「鹿地亘事件」について、鶴沼で起きた事件について、在住の猪俣良樹氏により、ご自身ならびに、近親者の体験・見聞・研究等大変興味深い話をされた。

運営委員会 8月28日(火) 13名出席

平成19年9月例会 9月11日(火)10時～12時 24名出席

議題1 鶴祭(クガイまつり= 鶴中文化祭、9月22日)について - 準備状況の報告がされた。

議題2 鶴沼地区公民館まつり(10月27,28)について - 展示テーマは『楷の木』および、鶴沼で育った作家にする方向で検討中であることが報告された。

議題3 その他 - 会誌95号原稿の集結状況が報告された。

お話 - 長谷川路可-人と作品について、渡部瞭会員よりパワーポイントによりビジュアルな説明と話があった。

(文責 佐藤 弘)

編集後記

- *今年2007年は、鶴沼ゆかりの画家=長谷川路可(1897-1967)の生誕110年、没後40年という節目の年にあたりますので、特集を組みました。
- *そこで、路可についての紹介文を書き始めた矢先、池田眞弓さん(長谷川裕会員の姉上)にお話しする機会があり、東京で「長谷川路可を偲ぶ会」が開かれることを伺ったのです。特集を組むなら、ご遺族やお弟子さんからもご寄稿を賜りたいと考えていましたので、できれば出席したいとお願いし、厚かましくも割り込む形になりました。
- *ご長女の百世さんに偲ぶ会の直前に急いで書き上げた荒原稿をお送りしたところ、ご夫君の風巻義孝氏と連名でご遺族や引用文に対する非礼、事実誤認、最近判明した新事実、文章表現から誤字脱字に至るまで、延べ百箇所を超す極めて詳細なご指摘を賜り、数回の書簡のやりとりによって訂正を加えることができました。その愛情のこもったご指導には、お礼の言葉も見あたりません。深く深く感謝申し上げます。
- *図らずも路可の最期を看取った愛弟子の原田恭子さんには、恩師の思い出と失われ行く作品についてご寄稿を頂きました。
- *岡田会員には路可のアトリエについて考察をお願いしました。
- *続いて、6月の史跡見学を機に小林会員に明治地区の史跡、高田会員に見学記をまとめていただきました。
- *鈴木会員には鶴沼中学の創立60周年記念植樹に贈られた楷ノ木について紹介していただきました。これは、鶴中の「鶴祭」で語る会の展示に採り上げ、公民館まつりでもさらに詳細に展示の予定です。
- *前号に引き続き、故今井達夫氏の遺稿集の中から、今回は小説『秋の蛇』を紹介します。(渡部)

- *本号から編集長をおおせつかっておりましたが、原稿依頼や原稿集めなど一番大事な時期である7、8月に鶴沼を留守にしていまいしました。結局、前編集長におんぶにだっこになってしまいました。次号からガンバリます。(岡田)

『鵠沼』 第95号
平成19年9月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>